

# 2020（令和2）年度 自己点検・評価報告書

神戸海星女子学院大学  
2021（令和3）年7月

# 2020（令和2）年度 自己点検・評価報告書

## 目 次

I	自己点検・評価（目標）	1
II	大学・学部等の現状とその評価	
1	自己点検・評価委員会	7
2	教務委員会	9
3	F D・S D委員会	11
4	国際交流委員会	13
5	保育・教職委員会	17
6	学生委員会	19
7	キャリア委員会	24
8	相談委員会	28
9	入試委員会	33
10	宗教委員会	38
11	図書委員会	42
12	生涯教育委員会・地域交流委員会	46
13	英語観光学科	48
14	心理こども学科	50

# I 自己点検・評価（目標）

## 2020(令和2)年度 自己点検・評価 (目標)

	委員会・学科	委員長	基準	2020目標
1	自己点検・評価委員会	尾崎	2-⑤	内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。
2	教務委員会	石原	4-⑥ 4-⑦	教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に、「卒業生アンケート」から学修の実態、成果を分析し、公表する。また、IR室との連携により、さらに公表すべき情報について検討し、公表の準備をする。
3	FD・SD委員会	濱田	6-④ 10-⑤	教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。
4	国際交流委員会	酒井	4-④ 7-②	国際交流プログラムを通して、学生がグローバルな視点で考え、発信する力を養成する支援を行う。また新型コロナウイルスの影響で海外留学が実施できない状況下において、オンライン留学やオンライン交流会を実施し、他国の学生との交流を図る。
5	保育・教職委員会	堀	7-②	学生支援体制の整備の一環として、個々のニーズに応じた指導に取り組み、キャリアセンターとの一層の連携を図る。
6	学生委員会	南	7-①	新型コロナ感染症の影響を主に学生のアンケート調査を行い、学生一人ひとりに対するサポートを強化する。
7	キャリア委員会	酒井	7-②	就職活動の早期化に応じ、キャリアプログラムを再考し、4年間のキャリアサポートを充実させる。 (1) 4年間を通じて自身のキャリア形成の成果を確認できるキャリアマップの作成 (2) WEB対策の強化（WEB面談室、Google Classroom）、ステラワークの活用 (3) 学生に情報発信を行い、学生自らが情報を取りに行く力につける。
8	相談委員会	中植	7-③	学内の相談体制を整える
8	H相談委員会	中植	7-②	(1) 学生対象にハラスマント防止啓発活動を行う。ハラスマントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスマント防止への意識を高める。 (2) 教職員対象にハラスマント防止研修会を行う。学生同様、ハラスマントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスマント防止への意識を高める。
9	入試委員会	尾崎	5-③	2021（令和3）年度入試において、両学科で入学定員を確保する。
10	宗教委員会	中植	1-① 1-②	学生が少しでもキリスト教的精神に触れる機会を設ける。
11	図書委員会	大岸	8-③	学修に必要な図書・資料を整備し、館内環境を整え、展示やレファレンス等を通して学生の利用をサポートする。
12	生涯教育委員会 地域交流委員会	箕野	9-③	社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。
13	英語観光学科	石原	4-④	フィールドワークや研修が十分に実施できない社会的現状において、授業その他で自他の文化についての理解を深化させる機会を設ける。またその中で、課題を発見し、解決法について意見交換をしたり、発表したりする場を設定する。
14	心理こども学科	大岸	4-④	学生の学修を活性化する授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。

## II 大学・学部等の現状とその評価

## 1. 自己点検・評価委員会

### P 【目標】基準2-⑤

内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。

### D 【現状説明】

本学は、「真理と愛に生きるというキリスト教的価値観に基づき、人を支え、社会に奉仕する女性の育成を目指す」という建学の精神と「真理を探求して専門分野の学問を学びながら、知性と感性を身に付け、世界的視野に立って考え、良識をもって判断し行動できる女性、また、自らが神から愛された存在であることを知り、人を愛し、人を支え、社会に奉仕することのできる女性の育成を目指す」という教育理念・目的を掲げ、卒業生全員に求められる共通の人格的素養として KAISEI パーソナリティ(思いやり、自律、知性、奉仕、倫理、国際性)を定めて教育研究活動を進めている。

本学での内部質保証は、「内部質保証に関する方針」、「内部質保証規程」、「学則」及び「自己点検・評価委員会規程」による明示された内部質保証に関する方針及び手続きにより自己点検・評価委員会を中心として推進されている。

自己点検・評価委員会は、各学科及び各委員会による教育研究活動及び大学運営の状況に関する自己点検・評価活動の促進を定期的に図るとともに、各学科及び各委員会の点検・評価の結果及び改善に向けた方策を取りまとめ、学長を通じて内部質保証の統括推進組織である大学改革運営会議に報告し、大学改革運営会議がそれに対するフィードバックを自己点検・評価委員会を通して各学科及び各委員会に行い、それぞれが次年度の自己点検・評価活動の諸計画に反映させるという仕組みで進められている。

前年度の自己点検・評価報告書については、以下のように進めた。

6月3日の会議で提出された前年度の入試委員会の報告書を検討し、意見があれば8日まで通知することとし、なかつたので承認となった。10月13日に自己点検・評価報告書報告会を書面で開催し、前年度の報告書を全教職員で共有した。その時に自己点検・評価委員会の前年度報告書も併せて提示した。

11月4日の委員会で、自己点検・評価委員会の前年度の報告書について意見を求め、なければ自己点検・評価委員長の責任で加筆修正して、ほかの報告書と合わせて公表することを承認された。

今年度の自己点検・評価活動は次のように進めた。4月8日の年度最初の会議は新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく「緊急事態宣言」発令のため、書面会議となり、「建学の精神・教育理念・目的及びディプロマポリシーに基づく、学修成果の可視化」という全学的統一テーマを踏まえ、自己点検・評価項目及び評価の視点の10の基準に沿って本年度の目標を5月29日までに設定するよう依頼した。

11月4日の委員会で、各委員会の目標が出そろい、それを確認するとともに、各委員会の進捗状況を報告した。

2月3日の自己点検・評価委員会で各委員会の進捗状況を報告し、確認した。3月3日の自己点検・評価委員会で、自己点検・評価委員会と入試委員会を除く各委員会の報告書の説明があった。

3月17日に外部評価委員会が開催された。外部委員からは、各委員会の報告を理解していただき、コロナ禍での困難の状況の中で、本学の特徴である学生に寄り添う姿勢を保ちながら大学が取り組んでいる様々な工夫や努力を高く評価していただくとともに、まだしばらくコロナ禍が続くと思われるので、さらなる工夫や対応を求められた。地域貢献についても、これまでの子育て支援などの取り組みを評価されるとともに、「灘★こども塾」への協力参加が依頼された。

6月2日、入試委員会及び自己点検・評価委員会の自己点検・評価報告書を踏まえ、「2020(令和2)年度 自己点検・評価報告書」は承認され、内部質保証の推進に責任を負う統括推進組織である大学改革運営会議に提出した。

### C【点検・評価】

2020(令和2)年度の自己点検・評価活動は昨年度に引き続き、「建学の精神・教育理念・目的及びディプロマポリシーに基づく、学修成果の可視化」という統一テーマを掲げて目標を設定し、点検・評価を行ったが、新型コロナウイルス感染拡大という想定外の状況の中で、とくに春学期は会議もままならず、進行が大幅に遅れてしまった。しかし、その中でも各学科、委員会は、本学の特徴である学生に寄り添う姿勢を保ち続けて様々な活動を継続しつつ、しっかりと自己点検・評価活動を行えたことは、十分に評価できると考える。

これは以前からの懸案であるが、入試委員会と自己点検・評価委員会の報告書は年度が終わらなければ作成できないため、次年度での承認となる。そうなると担当者が変更されているケースもある。また3月後半ごろに開催される外部評価委員会でもこの2つの委員会からは報告できない。

また、外部評価委員会が本学の内部質保証の仕組みの中で明確に位置付けられていないという問題もある。

### A【改善策】

コロナ禍の状況はまだ収束しそうにない。昨年度同様の状況が続くのであれば、積極的にリモートでの会議などを行っていくべきであろう。

入試委員会と自己点検・評価委員会の報告書が年度を超てしまうことはやむを得ないことである。外部評価委員会については、両委員会の報告書が提出される次年度の6月あたりに開催してはという意見もあるが、それでは年度替わりの異動の可能性があるので外部評価委員の選定が委員会開催の直前になるという問題が発生する。

外部評価委員会の内部保証の仕組みの中の位置づけとしては、自己点検・評価委員会が大学改革運営会議に報告書を提出する前に開催されるので、そのことを明記すべきである。

## 2. 教務委員会

### P 【目標】基準4-⑥

教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に、「卒業生アンケート」から学修の実態、成果を分析し、公表する。また、IR室との連携により、さらに公表すべき情報について検討し、公表の準備をする。

### D 【現状説明】

今年度ホームページに掲載した教務関連情報は以下のとおりである。

- ・2019(令和元)年度 秋学期 授業改善に関する調査結果報告
- ・2019(令和元)年度 全学年 G.P.A. 分布
- ・2019(令和元)年度 卒業生アンケート集計結果
- ・2018(平成 30)年度 キリスト教研修アンケート
- ・2019(令和元)年度 キリスト教研修アンケート

### C 【点検・評価】

2019(令和元)年度及び 2018(平成 30)年度の卒業生対象に実施した「卒業生アンケート」から学修成果を分析した（資料）。

アンケートの中で、学生が4年間学修した結果、身につけるべき能力として定める学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）の内、全学的な方針についての達成度を表1にまとめた。また、表2は、演習やその他の授業及び学生生活全般を通して身をつけた力について問うた項目を抜き出したものである。達成したと思うかの問い合わせに対し、有効回答の内「そう思う」又は「いくらかそう思う」と回答した割合を示している。なお、2019(令和元)年度は、COVID-19 の影響により学生を集めてのアンケートが実施できなかったため、回収率が全体で36.8%と低いため、純粋に比較はできない（2018[平成 30]年度は 84.6%）。

表1 大学のディプロマ・ポリシーの達成度

大学のディプロマ・ポリシー	全体(%)		ET(%)		PC(%)	
	2019	2018	2019	2018	2019	2018
建学の精神に基づき、愛について学び、社会に奉仕する必要性が理解できた	91	91	100	92	84	91
社会人としての基本的な知識と技能を修得して自律し、正しい倫理観をもって判断する力が向上した	88	91	100	87	78	93
人と共感する感性をもち、異文化を理解し、平和のために努力する姿勢をもつことができた	91	91	100	96	83	87

(ET: 英語観光学科、PC: 心理こども学科)

表2 その他授業と学生生活によって身につけたこと

その他授業と学生生活によって身につけたこと	全体(%)		ET(%)		PC(%)	
	2019	2018	2019	2018	2019	2018
課題発見力及び課題解決力が身に付いた	84	93	86	88	83	97
専門的な知識・技能とその応用力	91	100	93	100	89	100
幅広い教養	88	94	100	100	78	90
責任をもって主体的に行動する力	88	93	86	92	89	94
人と社会に奉仕する力	97	87	100	92	94	84
人の意見に耳を傾け人とコミュニケーションを図る力	97	89	100	96	94	84
異文化を理解する力	91	91	100	100	83	84

結果から、回答者の約8割以上の学生、学部で平均すると約9割の学生が、専門的知識や技能を身につけ、課題発見・解決力を培ったと自己評価し、社会で責任をもって行動する主体性やコミュニケーション力を身につけたと振り返っている。

一方で、1割から2割の学生が「どちらとも言えない」「あまり思わない」「思わない」のいずれかで回答していることになる。全学生が納得のいく学修成果を修めることは難しいが、各学生がそれぞれの習熟度を認識した上でそれに合った目標設定をし、その目標を達成できるように個別の指導が必要である。

#### A 【改善策】

学修成果を出すことができたと自己評価していない1・2割的回答には、学生自身の努力不足により成果が出なかった、学生による目標設定が適切でなかった、教育内容が学生の期待するものと違っていた、などさまざまな理由が考えられる。これらの解消のために、各教科担当者が、授業や課題を通して履修学生の声を聞き取る工夫を継続すると同時に、各学期に実施をする担任による個別面談において、各学生の目標設定の妥当性について振り返り、その目標に向けて何をすべきかを話し合うようにすることも一案である。

回答率を上げるためにには、できるだけ全学生登校日に一斉に実施をする。アンケートの匿名性を考慮すると、アンケート実施日に欠席であった学生からの回答を得る方法には工夫が必要である。

また今後は、IR室との連携により、さらに公表すべき情報やその分析について検討していく。さらに、学生一人ひとりの学修成果と修学における様々な悩みなどを、年度が変わっても容易に振り返り、把握することができるような環境を整備すべく、2022(令和4)年度目標で計画をしている。

### 3. FD・SD委員会

P【目標】FD 基準6-④ SD基準10-⑤

教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。

#### D【現状説明】

FDでは、組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげる。SDでは、大学運営を適切かつ効果的に行うために、事務職員及び教員の意欲及び資質の向上を図るために方策を講じる。

これらの点検評価項目および統一テーマから現在実施している業務を振り返る。

今年度は、新型コロナウィルス感染予防のために、春学期は②、⑤、⑦のみ実施した。

また、オンライン授業実施に向けて、教員研修としてZoom、Google の研修を実施した。

##### ① 授業評価

マークシートに無記名式でのアンケートをとる。質問項目例として、自分の授業に向かう態度、教員の授業評価を10項目で問うている。回答は5件法で思う、やや思う、どちらでもない、やや思わない、思わない。回答の全体平均は、春学期未実施、秋学期4.24であった。

##### ② 非常勤講師との面談

対面による面談がベストではあるが、今年度は、春、秋とも担当教員にアンケートを送付して意見を聞き取り、委員会で共通理解を図るとともに、関係部署との連携を図った。

##### ③ 学生に対する意見調査アンケート（任意）→今年度未実施

##### ④ 授業公開

秋学期のみ実施、それぞれ一コマを教員同士が自由に参観できる時間を設けた。

##### ⑤ 授業出席調査

秋学期のみ実施、全教員が15回の授業、各コマにおける出席人数を調査し、出席率を出した。全体平均出席率は、88.2%であった。

##### ⑥ 研修

各委員会が必要と考えた研修を悉皆で実施した。ハラスマント研修、Zoom、Google 研修を実施した。

##### ⑦ 授業結果・授業改善報告

質問項目1、2ではシラバス記載の達成度を担当教員がS⇒評価不能の人数等で振り返った。なお、質問項目3～7については、大まかな記述内容（抜粋）を全教職員にフィードバックして次年度の参考とする。

## C 【点検・評価】

上記①から⑦においてそれぞれについて再度点検・評価を行った。

### ① 授業評価

春学期未実施、秋学期の回答の全体平均は 4.24 であった。

### ② 非常勤講師との面談

アンケートによる意見収集であったが、授業での学生の様子や施設要望など、委員会で共通理解し、関係部署と連携できた。

### ③ 学生に対する意見調査アンケート（任意）

今年度は春・秋ともに未実施

### ④ 授業公開

今年度は、春学期はオンライン、秋は対面（ソーシャルディスタンス）+オンラインで実施したこともあり、互いに見合うまでには至っていない。

### ⑤ 授業出席調査

春学期は集計困難なため、未実施。秋学期については、全授業の平均出席率は 88.2% だった。欠席する学生が固定化していることに課題が残る。学科会議での学生の情報交換により対応している。

### ⑥ 研修

自粛の影響もあり各委員会も思うように実施しにくい状況だった。ハラスマント研修は有意義な研修内容だった。また、オンライン授業の必要性から Zoom、Google for Education 研修をグループまたはオンラインで実施して、授業に生かすことができた。

## A 【改善策】

今年度は多くのことが臨機応変かつ試行錯誤で実施せざるをえない状況であった。しかし、教職員が様々な対策に一丸となって取り組み、個々の学生に例年に近い学修を提供できた。

改善すべきこととして、春・秋「授業結果・授業改善報告」の提出を求めていたが、そのフィードバックが不十分だった。今回、記述内容の抜粋を全教員に共有して、オンラインでの授業工夫等参考資料として提案したい。

オンラインのマイナス面だけではなく、Zoom でのグループ討議などは、アクティブラーニングに近い取り組みともいえる。その集計方法も課題としてあげたい。

#### 4. 国際交流委員会

##### P 【目標】基準4-④

国際交流プログラムを通して、学生がグローバルな視点で考え、発信する力を養成する支援を行う。また新型コロナウィルス感染症の影響で海外留学が実施できない状況下において、オンライン留学やオンライン交流会を実施し、他国の学生との交流を図る。

##### D 【現状説明】

本年度は新型コロナウィルス感染症の影響ですべての海外留学プログラムは中止となつた。そのため下記①～③のオンラインプログラムを実施した。

###### ①オーストラリア・クイーンズランド大学の語学プログラムの実施

期間：2020年8月24日～9月18日4週間

参加者：2名

単位認定：有、留学支援金：10万円支給

###### ②オーストラリア・クイーンズランド工科大学の語学プログラムの実施

期間：2021年2月15日～3月19日4週間

参加者：なし

単位認定：有、留学支援金：10万円支給

###### ③サンローラン学園オンライン交流会

第1回：2020年12月9日（水）20:30～22:30

参加者：本学学生9名、サンローラン学生16名

テーマ：食について、両校のプレゼンテーションとディスカッション

第2回：2021年1月20日（水）20:30～22:30

参加者：本学学生：6名、サンローラン学生：14名

テーマ：地域の観光地について、両校のプレゼンテーションとディスカッショ

語学留学プログラムは現地との時差を考慮してオーストラリアの大学で実施しているオンラインプログラムを提供した。1日4時間×5日×4週間=80時間のプログラムで1クラス10～16名でWritingとSpeakingを中心にグループ・ディスカッションも取り入れた授業内容であった。クラスの国籍は日本人が多く、他国では韓国、台湾、中近東、南米など様々な国や地域から参加していた。

## C 【点検・評価】

本年度は新型コロナウィルス感染症の影響により、オンラインでのプログラムを実施したが、オンライン語学留学に関しては、参加者が少なかった。要因としては英語力の修得においてはオンラインでも学習効果は十分得られるが、留学における異文化体験として現地での生活体験や現地の学生との交流などオンラインでは限界があると考える。新型コロナウィルス感染症の世界的な感染の終息と入国制限の緩和により、早期海外渡航が可能となることを願うばかりである。

### ①②オンライン留学について

オーストラリア・クィーンズランド大学のオンライン留学に参加した学生のアンケートからは満足度が高い評価であった。授業ではグループワークの時間が多く取り入れられ、日本人や外国の学生達と英語で課題についてディスカッションを行うことで、スピーキング力やリスニング力も養うことができた。また偶然ではあるが本学のカリキュラムの「Oral Communication 500」と「Oral Communication 600」で使用されている教科書が同じだったので、春学期の復習と秋学期の予習になったようである。またグループワークでお互いの国の文化やマナーについて話し合う機会もあり異文化理解の修得となった。

オンライン留学は時差の問題もある為、オセアニア地域でのプログラムの実施が本学の学生にも負担がないと感じた。また、語学力や異文化理解に関しても一定の学修効果はオンライン留学でも認められた。春休み実施予定のオーストラリア・クィーンズランド工科大学のプログラムは募集期間が短かった点とプログラムの告知が不十分であった為に催行することができなかった。

### ③サンローラン学園オンライン交流会

交流内容はサンローラン学園の日本語クラスの生徒と本学の学生（希望者）がサンローラン学園の日本語クラスでの授業時間内に実施した。その為、日本での開始時間は 20：30～と夕刻での開始となった。参加した本学の学生からは時間の問題を指摘する学生は少なく、サンローラン学園の学生も対面とオンラインでの併用授業で、日本語クラス終了後も両校の学生はオンライン交流を継続していた。

第 1 回目の交流では食をテーマに本学学生がプレゼンテーションを行い、学生の身近な料理やレストランの紹介を行った。第 2 回目はサンローラン学園から食のプレゼンと両校の地域観光についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションはパワーポイントを利用し、その発表について質疑応答を行った。テーマ毎にそれぞれの文化を紹介することで自国の調査・研究を行う機会が得られ、またプレゼンテーションにおいて発信力も養えた。

問題点としては両校の共通言語である英語力が本学の学生レベルが乏しく、コミュニケーションが十分行えていない場面もあり、英語力の強化を図る必要性を感じた。英語力不足を学生自身も感じ、これから英語学修のモチベーションになれば海外交流プログ

ラムの役割は果たせたのではないかと考える。

サンローラン学園との2回の交流会では英語観光学科1年生から3年生の延べ15名の参加があった。参加者に対して行ったアンケート調査の回答についてまとめた。

#### [調査項目]

① 交流会を楽しめたか

② 自身の目標を達成できたか

回答者全員が目的を持って交流会に参加しており、異文化理解の発展、フランス語の使用、プレゼンテーションとディスカッション能力の向上などが目標とされていた。

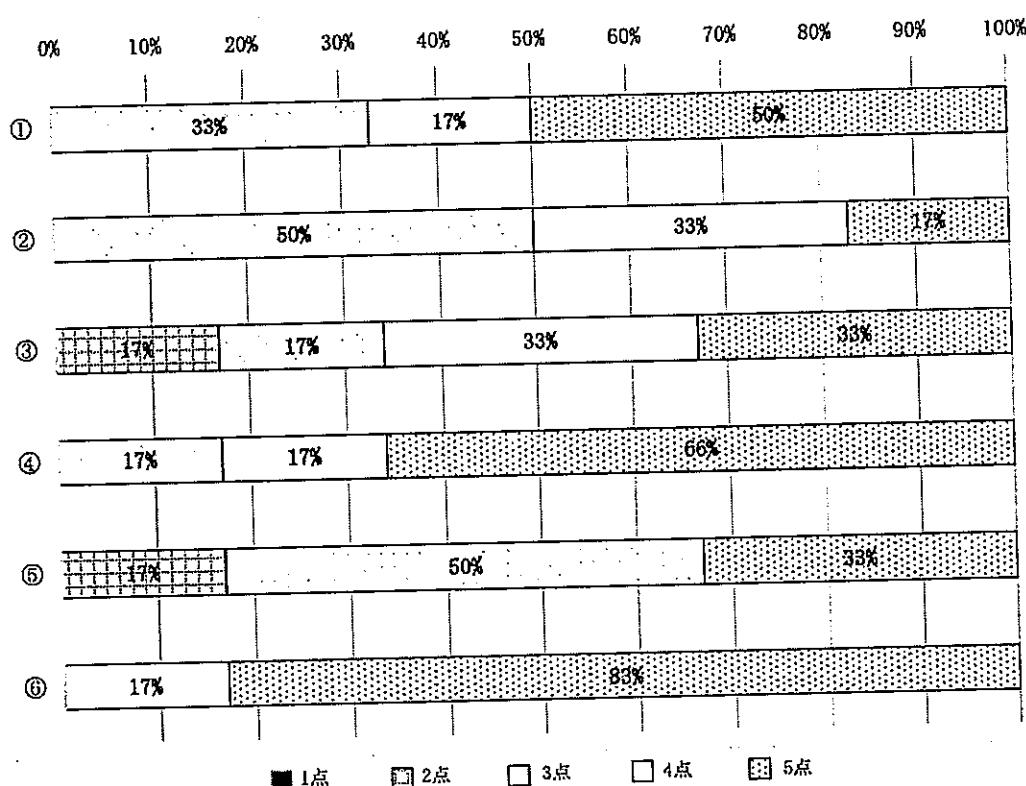
③ 交流会を通して異文化について学ぶことができたか

④ 語学学習について見直すきっかけになったか

⑤ プrezentationの満足度

⑥ プrezentation方法について見直すきっかけになったか

サンローラン交流会アンケート調査結果（図1）



#### [回答結果]

上記の質問に対する回答を図1に示す。5段階評価で回答を求めたが、最低点をつけ

る学生はおらず、交流会に概ね内容に満足し、またこの交流会において自身の目標や交流に関わるスキルに関して見直しが必要であるという気付きを得ることができた。各項目に関するコメントでは、自身のスキルの現状やどのような点において改善が必要かについて具体的に記載されていた。交流の内容だけではなく、国際交流をする上で必要なスキルや不足している点を学生自身が身をもって学ぶことができる重要な機会となった。また今後も交流会を続けたいかと言う質問に対しては全員が続けたいと回答した。

#### A 【改善策】

本年度実施したオーストラリア・オンライン留学とサンローラン学園オンライン交流会から問題の改善を行う。

##### ①オンライン語学留学

オンライン語学留学においては英語力を修得することは問題ないと考えるが、実際の海外留学との比較で現地での生活体験や他国の学生とのリアルな交流がない点ではオンラインでの留学体験には限界はあると考える。本年度は短期の語学オンライン留学であったが、中長期留学対象者にオンライン留学を推奨することは可能かを検討していく必要がある。

オンライン留学のメリットとしては費用面で通常の留学と比較して 1/4 程度に抑えられることである。留学に行きたくても経済的に困難な学生にも海外の学生との交流が図られ、英語力を修得する機会を提供することができる。

学生への告知に関しては留学説明会でプログラム内容を詳細に伝えることが必要であると考える。今回参加した学生のフィードバックを留学希望学生に伝えることでプログラム内容を認識させ参加者を増加させていきたい。

##### ②サンローラン学園オンライン交流会

サンローラン学園は日本の高等学校に当たる年代の生徒が参加しており、また日本語クラスの担当教員との交流の為、共同研究・調査のような形態を取ることが難しかったので、今後は提携校の靈山大学や他のアジア・オセアニア地域の大学との交流を行い、観光関連の共同研究を目的とした交流会にする必要がある。

サンローラン学園とは 1 ~ 2 年次生向けの交流プログラムとして継続することが望ましいと考える。またテーマを絞り、プレゼンテーションだけでなくディスカッションができるよう課題テーマを設定して交流会を実施していく必要性を感じた。

来年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、オンラインを中心とした国際交流プログラムが実施されることが予想されるので、本年度実施したオンライン留学及び交流会を更に進化させ、学生がグローバルな視点で考え、発信する力を養成できるよう支援を行っていく。

## 5. 保育・教職委員会

### P 【目標】基準7-②

学生支援体制の整備の一環として、個々のニーズに応じた指導に取り組み、キャリアセンターとの一層の連携を図る。

### D 【現状説明】

#### (1) 保育士資格取得カリキュラムについて

2020年度の入学生から新たな保育士課程をスタートさせ、保育士資格及び幼稚園教員免許状の両方を取得できるカリキュラム編成の一環として、学生の負担軽減のため、両者に共通の科目を設置している。

#### (2) 心理こども学科のカリキュラムを2019年度に再編成した結果、卒業要件が分かりやすくなり学科の特長を生かせる科目編成になっている。

#### (3) 保育・教職か企業就職かで迷う学生も多く、その指導のため、キャリアセンターとの報告連絡相談を密にしている。

### C 【点検・評価】

#### (1) 年度当初から新型コロナウイルス感染症対策のため、オンライン授業を余儀なくされてきた。しかし、実技等で対面授業の必要性が高い保育・教職の教科は感染対策を万全にして学期の終盤に集中実施した。

#### (2) 新型コロナ感染症対策の緊急事態宣言の期間に関わらず、オンラインの特性を生かして個々の面談を頻繁に行い、学生のニーズの把握に努めた。

#### (3) 介護実習については新型コロナ感染症の対策のため介護等の施設での実習が中止となり、代替としてレポート提出となり、このための指導も別途行った。

#### (4) 保育・教育実習については新型コロナ感染症の流行のため実施が危ぶまれたが、関係各方面の尽力により予定していた全員が延期や短縮で実施できた。

#### (5) 学生要覧に保育・保教センターの業務の追加一覧を載せた。

#### (6) 保育・教職（幼）向けの「就職の手引き」を作成し、活用をしている。

#### (7) キャリアセンターが実施している就職対策講座に保育・教職志望の学生も積極的に参加できるように指導した。

#### (8) 保育・教職センターの支援体制と連携して、資格取得及び就職支援を行っている。

#### (9) 教員採用試験対策講座や個別指導をオンラインや対面で開催した。

### A 【改善策】

#### (1) 昨年度より学生の就職内定や採用試験結果等の進路状況を保育・教職委員会で随時報告している。これは全教員が学生の進路状況の情報を共有することになって

いる。この情報を基に激励や追指導の学生支援を行い、超小人数大学ならではの効果を上げている。より効果的な情報提供に取り組みたい。

- (2) 今後とも、進路調査等の情報について所管を超えて共有し、個々の学生の指導が充実するようにしたい。
- (3) 今年度、緊急対応で実施したオンラインでの個別面談は、大変効果的であった。次年度も緊急事態にかかわらず、学生の状況に応じて隨時実施できるようにするため、メール、Google-classroom、Wi-Fi 等の通信系統は平時も使用したい。

## 6. 学生委員会

### P 【目標】 7-①

「新型コロナ感染症（COVID-19）の影響」を主に学生のアンケート調査を行い、学生一人ひとりに対するサポートを強化する。

### D 【現状説明】

2020年、COVID-19 感染予防のため、4月の入学式は中止、学科別的新入生オリエンテーションが4月6日まで行われたが、緊急事態宣言発令により8日以降の予定は中止、学生の登校が禁止になった。春学期は5月11日に授業が開始されることになるが、授業はオンラインとなり、学生が登校したのは教科書販売日の1日、僅か1時間にも満たない短時間だけであった。学生部は学生の様子や思いを探ることもできないまま、生活のあらゆる場面でインターネットを活用する未知の生活に突入することになる。授業の前後に教員に質問をする、教務課・学生課に気軽に立ち寄る、課題について友人に尋ねるといった何げない日常の行動が叶わず、学生はいまだかつて経験したことのない自粛生活を強いられ、パソコンやスマホと長時間向き合う日々を送る。主たるコミュニケーション手段がオンラインになった学生が、何を思い、何を考え、どんな日常を送っているのか。特に、新しい環境に飛び込み、親しい友人や頼れる教員にまだ出会えていない新入生は、どんな思いで自分自身と向き合っているのか。学生課・学生委員会は、一人ひとりに寄り添い、心身を支えたいという強い思いに駆り立てられながら、次のことに取り組んだ。

#### ①奨学金について

例年行われている日本学生支援機構予約採用者の手続き・国の高等教育の修学支援新制度の申請他奨学金の案内については、手続きの方法をすべて詳細にHPに掲載、電話やメールでの個別の相談にも丁寧に対応した。また、COVID-19に対する日本学生支援機構奨学金一家計急変一・日本学生支援機構緊急特別無利子貸与型奨学金・「学びの継続」のための学生支援緊急給付金・神戸海星女子学院大学特別緊急授業料減免等はHPに掲載するだけでなく、情報が確実に届くように、適応する学生に適宜呼びかけた。

#### ②新入生へのアプローチ

新入生に対しては、学生生活の様子を知り、理解してもらうために「学生生活①前編・後編」「学生生活②」の計3本の動画を作成し、配信した。クラブ案内の冊子や学生相談室の利用案内「ひとりで悩んでいませんか」を作成し、必要に応じて送付し、大学とつながっていること、困ったことや心配していることについてはいつでも気軽に相談できることを強調して伝えた。

#### ③学生生活アンケート

学生課に電話やメールで質問等の積極的な行動がとれる一部の学生を除き、大半の学生の近況はわからず、もどかしさを感じていた。そんな中、学生全員の状況を把握するという目的で、「学生生活アンケート」の実施が学生委員会で提案された。課題に追われ、複数の教員から届く数々のメールに煩わしさを感じていることも、学生の声として確認

していたが、学生の状況を把握したいという強い思いを実現するために、実施を試みることにした。6月中旬から準備にかかり、7月3日に1~3年次生を対象に実施した。4年次生には、キャリア支援の目的でキャリア委員会から別内容のアンケートを実施した。

#### ④対面授業実施に際しての取り組み

その後も、COVID-19による新しい生活様式や正しい情報を伝えるために、「新型コロナウィルス感染拡大の注意喚起」「夏期休暇中の過ごし方について」等、HPから告知を続けた。秋学期からは対面授業が行われることになったが、「秋学期対面授業に向けて学生の皆さんにお願いしたいこと」「冬季対面授業に向けて学生の皆さんにお願いしたいこと」

「サポートルーム Stella と学生相談室の案内」等掲示物を作成し、学生が安全な学生生活を安心して送るために配慮を続けた。他にも、「体調管理シート作成」「オンラインクラブ活動届」「クラブ対面活動届」等を作成。「アナウンス研究会によるお昼の放送」のサポートや、マスクを外す昼食時の巡回指導も学生委員会先行で行った。冬季休業・年度末休業の際の第2回・第3回下宿生・留学生の会は、一人でもたくさんの学生の近況を知ることを目的に、オンラインで面談を行った。

#### ⑤第2回学生生活アンケート

そして再び、全ての学生のこの1年間の思いや状況を把握するために「第2回学生生活アンケート」を実施することにした。

### C 【点検・評価】

#### 〔第1回学生生活アンケート〕【資料1・2】

日時：2020年7月3日

方法：グーグルフォーム

目的：春学期における学生生活の現状を聞き、一人ひとりに適応した支援を行うこと

対象：1~3年次生（4年次生に関してはキャリア委員会のアンケートで併用。）

回答数及び回答率：1年次生 80名（全107名、74%）、

2・3年次生 120名（全188名、64%）

質問内容：オンライン授業になれましたか？

規則正しい生活を送っていますか？等

\*1~3年次生については、質問項目はほぼ同じであるが、1年次生は前年度と比較ができない設問と教職員とのつながりを問う設問を省いた。

記述的回答【資料3】に対して、「今、個人的に支援してもらいたいことはありますか？」の質問に、「ぜひ話を聞いてもらいたい」「少し話がしてみたい」と答えた11名すべてと、「コロナで家庭環境に変化があった人」「今、望んでいること、やってみたいこと、要求したいことの自由記述」で返答が必要だと思われた9名、そしてクラブに関する質問を記述した1年次生4名に対して、電話やメールで個別対応を行った【表1】。学生部から個別に返答をしたこと、また他愛のない話をしてことなどで、不安が和らいだ、問題が解決した、情報を得ることができたと喜んでもらえた。特に、支援を必要としているにも関わ

らず、自分から大学に相談できなかった学生 2 名をサポートルーム Stella につなぎ、単位修得に向けて援助することができた。その他の学科や教務に関する質問は、各関係部署に回答を依頼した。学生の質問の回答は、学生委員会や教授会で全教員と共有した。

【表1】

	要望・質問	手段	回答
1	少し話がしてみたい。	電話	受講について。大丈夫です。自分なりに頑張っています。
2	少し話がしてみたい。	依頼	精神的にしんどいという情報を得、教務課から連絡。サポートにつなぐ。
3	学生広報委員会や大学祭運営委員会について聞きたい。	メール	クラブに対する質問。紹介と勧誘。
4	学生広報委員会や大学祭運営委員会について聞きたい。	メール	クラブに対する質問。紹介と勧誘。
5	サークルについて。	メール	クラブの説明、勧誘。
6	少し話がしてみたい。 サークルについて。授業形態について。	メール	クラブと、秋からの授業形態について説明。
7	少し話がしてみたい。	電話	担任、教務課、保健センターにつなぐ。
8	少し話がしてみたい。現状と奨学金について。	メール	奨学金について説明。
9	少し話がしてみたい。授業について。	電話	検定試験や授業について対話。
10	授業について。	電話	オンラインにおける授業の困り事等。
11	少し話がしてみたい。就職について	電話	就職セミナー等大学の取り組みを示唆。
12	少し話がしてみたい。	電話	大丈夫です。頑張っています。
13	少し話がしてみたい。	電話	対面授業希望。今は大丈夫です。
14	履修について。	電話	オンラインのこともあり、履修について不安を感じていた。安心できた。
15	出席について・図書館の利用について	電話	HP の活用等、話することで精神的ストレスを解消。
16	ぜひ話を聞いてもらいたい。	電話	将来について、金銭的な事、健康を害した事(軽傷)など、凹んだ状態。対話によって和らげた。
17	少し話がしてみたい。	電話	履修について気軽に相談したかった。いつでも対応できることを伝達。
18	オンライン環境について話がしたい。	電話	授業について気軽に相談したかった。いつでも対応できることを伝達。
19	就活について質問がしたい。	電話	キャリアセンターの利用法について案内。以後意欲的に面談を申し込んでいる。
20	教職について。	電話	学科教員につなぐ。

〔第2回学生生活アンケート〕【資料4・5】

日時：2021年2月8日

方法：グループフォーム

目的：2020年における学生生活の状況を聞き、一人ひとりに適応した支援を行うこと

対象：1～4年次生

回答数及び回答率：268名（全379名、70.7%）

質問内容：2020年、一番気分が沈んだ時期はいつですか？

とても辛くて、落ち込んでしまうことはありましたか？等

対面授業が行われているためか、急を要する回答は第1回に比べて少なかったが、この1年間の生活や大学の環境に対する意見は、かなり具体的で細密な内容が多かった。学生は、飾らない言葉で、実直に返答していることがうかがえる。第1回と同様、「大学を辞めようか悩んでいる」という学生にはすぐ連絡を取り、学生の気持ちを前向きに切り替えることができた。引き続き、資格について・就活について質問がある学生には、学生委員会の教員及び学生課から順に連絡を取っている。学校への要望の記述については、第1回同様、学生委員会や大学改革会議等で諮るつもりである。

〈アンケート結果からの問題点〉

①学生相談室について〔第1回学生生活アンケート〕【資料1】【資料2】

【ア】学生相談室があることを知っていますか？

	はい (%)	いいえ (%)
1年次生	65	35
2・3年次生	59	41

【イ】学生相談室の利用方法を知っていますか？

	はい (%)	いいえ (%)
1年次生	56	44
2・3年次生	23	77

1年次には動画で案内をしたため記憶に新しいのかもしれないが、相談室について2・3年次生の44%が設置していることを知らず、77%が利用方法を知らないのは問題である。

②相談体制について〔第2回学生生活アンケート〕【資料4】

【ウ】担任以外に、相談できる教職員はいますか？

はい (%)	いいえ (%)
61	39

担任はもちろん一番近しい存在で、相談しやすい存在でなければならないが、学生課・教務課・保健センター・学生相談室他、学科の教員誰にでも相談できるという体制を、も

っと確立させる必要がある。

#### A 【改善策】

今年は、学生の思い・考え・現状を知り、一人ひとりに適した支援を行うことを目的にアンケートを実施した。悩んでいる学生や質問がある学生に連絡を取り、話を聞き、コミュニケーションを図ることで、学生が生活や修学に向かう気持ちを前向きにすることができた。しかしながら、始業時間や授業料等など全学的な問題に対して済然としない事案を抱えている学生に、どういう形で返答をするのが適切か、現段階における課題である。

学生を知り、個々が望むサポートを実行することが、眞の支援である。アンケートを記名で行うか否かも思案するところであるが、質問や要望があるにも関わらず、無記名のため返答できないケースが少なくない。大学と学生との間に信頼関係を確立させ、記名により、確実に返答を行うことが有意的であると考える。アルバイトが激減したという 18% の学生についてはできるだけ個人を特定し、次年度の支援につなげたい。

次年度も引き続き同様のアンケートを実施し、一つ一つ、個別に丁寧に対応する姿勢を貫きたい。担任だけでなく、学生相談室・サポートルーム Stella 等、様々な支援体制の周知に努め、各関係部署と連携し、超小人数の大学だからこそ成しえる学生支援の実現に向けて、積極的なアプローチを続ける。

## 7. キャリア委員会

### P 【目標】基準7-②

就職活動の早期化に応じ、キャリアプログラムを再考し、4年間のキャリアサポートを充実させる。

### D 【現状説明】

昨年に続き大学生の就職活動の早期化は改善されていない。2020年度は新型コロナウイルスの影響で多くの企業が早期の学生確保に動いたことも要因である。また、新型コロナウイルス感染症の影響で観光業界を中心に多くの企業が採用を抑制し、就職内定率も2020年11月30日現在の状況も英語観光学科では前年比で8.5ポイント低下した。また、採用活動においてもコロナ禍では対面面接ではなく、多くの企業がオンラインでの面接を実施しているが、対面と比較して人物評価が難しいことから春休みに実施されるインターンシップを通じて採用を実施している企業も増えている。このような状況下では更なる低年次からのキャリア教育が必要であり、その内容も将来の職業に関して具体的に自己のキャリアを考える機会の創出が必要である。以下、2019年と2020年度実施したキャリアプログラムを記載する。

#### ◆【キャリアデザイン】1年次対象

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため緊急事態宣言発令が発令され、春学期の授業（英語観光学科）は、全てオンライン授業に変更して実施した。

秋学期の授業（心理こども学科）については対面授業+オンラインのハイブリッドで実施した。

2019年度 内容・担当	2020年度 内容・担当
KAISEI パーソナリティを学ぶ（学長）	適性検査（キャリアセンター員）
適性検査（キャリアセンター員）	適性検査の結果報告（キャリアセンター員）
適性検査の結果報告（キャリアセンター員）	本校のキャリア教育（キャリアセンター員）
本校のキャリア教育（キャリアセンター員）	将来のために今やるべきこと（学科教員）
将来のために今やるべきこと（学科教員）	KAISEI パーソナリティを学ぶ（学長）

#### ◆【海星学Ⅰ】現代人間学部2年次生対象（春学期）

春学期は全てオンライン授業で実施

2019年度 内容・担当	2020年度 内容・担当
キャリアプログラム1 「社会を知る」（日本年金制度）	キャリアプログラム1 「社会を知る」（日本年金制度）
キャリアプログラム2	キャリアプログラム2

「社会で働く」とは（外部講師）	「社会で働く」とは（外部講師）
キャリアプログラム3 「職種・業界」を学ぶ（外部講師）	キャリアプログラム3 「職種・業界」を学ぶ（外部講師）
キャリアプログラム4 「キャリアを考える」（職員）	キャリアプログラム4 「キャリアを考える」（職員）

◆【海星学Ⅱ】現代人間学部2年次生対象（秋学期）

秋学期は対面授業+オンラインのハイブリッドで実施

2019年度 内容・担当	2020年度 内容・担当
キャリアプログラム1 「卒業生によるピアサポート①」	キャリアプログラム1 「卒業生によるピアサポート①」
キャリアプログラム2 「卒業生によるピアサポート②」	キャリアプログラム2 「卒業生によるピアサポート②」
キャリアプログラム3 「社会で働く①」（職員）	キャリアプログラム3 「社会で働く①」（職員）
キャリアプログラム4 「社会で働く②」（学科教員）	キャリアプログラム4 「社会で働く②」（学科教員）

例年卒業生によるピアサポートの授業は1名の卒業生に講話をしてもらっていたが、2020年度は2名の卒業生に2教室に分かれて講話をしてもらい、学生は選択制で受講した。

(10/27実施) キャリアプログラム1 「卒業生によるピアサポート①」※

ET学科：(2019年3月卒業 JAL)

PC学科：(2015年3月卒業 公立小学校教諭)

※どちらの学科を受講するかは選択制

(11/10実施) キャリアプログラム2 「卒業生によるピアサポート②」※

ET学科：(2018年3月卒業 みなと銀行)

PC学科：(2017年3月卒業 神戸市立保育所)

※どちらの学科を受講するかは選択制

昨年より2年次にキャリアプログラムを追加し、自身のキャリアに対する意識を深め、より実社会との関係性が構築できるようになった。本学のキャリア教育の根幹は本学の教育理念である「社会や企業が求める人間力を身につけるため」という KAISEI パーソナリティの学修を通して、学科教員、外部講師、キャリアセンター職員及び卒業生の講義により実社会でのニーズを把握することで自己成長の目標設定を行い、そ

れに向けて学修や研究を深めていくことでキャリア形成を明確にすると考えた。

### C 【点検・評価】

1年次の「キャリアデザイン」ではグループワークを中心に講義が行われ、自己のキャリアについて考えて行動できるようになることが到達目標である。講義では適性検査を実施し自己分析を行い、社会で生きてく中で人、社会、仕事そして自分との出会いがあり、この出会いを中心にこれからキャリア（仕事）を考えしていくことができた。学生は社会情勢や雇用形態などより具体的な社会人として必要な知識を修得し、自己分析の機会を得ることができた。

2年次の「海星学」では春学期4回、秋学期4回の講義を実施した。春学期は「社会を知る」、「社会で働くとは」「業種・業界を考える」「キャリアを考える」を外部講師及びキャリアセンター職員による講義を実施した。学生からは秘書検定、世界遺産検定など多くの資格取得の必要性が認識されてたとアンケート回答が示している。世界遺産検定では2019年12月実施で受験者数が17名であったが、2020年12月実施では受験者数が25名と前年比147%と大幅に増加した。また秘書検定においても2019年度の受験者数は9人で、2020年度はオンラインでの開催ではあったが、受験者数は28人と前年度比で321%と大幅に増加した。これは海星学におけるキャリア学修の成果と言える。また、秋学期のピアサポートプログラムでは航空会社、銀行の卒業生による講義ではより親近感を感じ、それぞれの業務内容やその仕事に就くために必要な知識や能力を知る契機となり、学生からのアンケートからも「業界・企業研究の必要性」、「TOEICスコア向上や資格取得の必要性」、「インターンシップの重要性」など多くの回答があった。これらのアンケート調査から学生への就職活動における目標設定ができたと考える。

就職採用面接においてTOEICスコアの必要性があるが、本学では1年～3年次までの定期的な試験データを取得しておらず、評価することができなかった。

### A 【改善策】

キャリア委員会では目標達成の具体的なアクションプランとして下記の3つを目標比掲げていた。

- ①4年間を通じて自身のキャリア形成の成果を確認できるキャリアマップの作成
- ②WEB対策強化（WEB面談室、Google Classroom）、ステラワークの活用
- ③学生に情報発信を行い、学生自らが情報を取りに行く力につける。

上記の目標に関しての評価を下記に記す。

- ① の目標に関しては教務課と連携したシステムにキャリアマップを組み込むことで学生の修学状況とキャリアを一元管理できるよう検討したが、システム導入

が遅れたため、キャリアアップを作ることができなかつたので、次年度は教務課と連携して完成させていきたい。

- ② の目標に関しては WEB 面接が主流となっているため、学内に WEB 面接ができる PC や通信環境を整えた WEB 面談室を設置し、多くの学生が利用している。更に学生の利用を増やすためにチラシ等を作成し、学生への周知を図った。利用人数のデータが取れていなかったので次年度は利用率を図るデータを取得したいと考える。また、3 年次におけるイーラーニング「ステラワーク（SPI）」の活用が不十分であるため、更なる活用の指導を 3 年次生のゼミ担当教員に協力を依頼したが、十分な成果が表れなかつた。次年度は英語観光学科においては 3 年次ゼミ全員 SPI 模擬テストを受験させて、学生に現状認識をさせ、ゼミの成績評価にも反映させるようにしていく予定である。
- ③ の目標に関しては Google Classroom を活用して学外の就職セミナーやイベントを掲載し、自らが各セミナーやイベント情報を取得し、参加するよう促したが、外部セミナーやイベントへの参加率は低く、改善する必要がある。改善策としては 3 年次ゼミ教員が積極的に関与してセミナーへの参加を指導することである。

キャリア形成に関して各学年に対応したプログラムを学生へ様々な経験のある講師を迎える講義を行い、将来のキャリアについて考える機会は非常に有益であると考える。次年度も引き続き本年度のプログラムを踏襲する予定であるが、各プログラムのアンケートにおいて数値データとして取れないものが多く、今後はアンケート内容を改善して各プログラムの内容における学生の評価や学びを可視化できるアンケートデータに取得できるよう改善する必要がある。

また、就職活動で必要な英語力を図る TOEIC テストに関しては 1 年次から 3 年次まで 1 年に 1 度全員が受験し、成長過程を確認する必要があるので各学年で毎年 1 回の TOEIC テスト受験を実施できるよう各学科に提案したいと考える。

次年度も就職環境は厳しい状況であり、学生一人一人に寄り添ったキャリア支援を教職員が協働で推進していきたいと考える。

## 8. 相談委員会

### P 【目標】基準7 学生支援②

#### (1) ハラスメント相談委員会

- ① 学生対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。
- ② 教職員対象にハラスメント防止研修会を行う。学生同様、ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。

#### (2) 学生相談委員会

学内の相談体制を整える。

### D 【現状説明】

#### (1) ハラスメント相談委員会

①に関しては、2020年7月の基礎ゼミの時間を利用して、ハラスメント防止啓発活動を実施した。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、研修はオンラインの形で学科ごとに行った。授業の一環だったこともあり、出席率は87%（ET84%、PC97%）であり、前年度の84%から増加、9割近い高い参加率を維持できた。昨年度同様、ハラスメントに関する基本的な知識をDVD視聴を通じて学び、また、昨年度までに実施した学生対象ハラスメント防止研修会で取り上げられた事例や質問についてまとめたレジュメを共有した。最後にアンケートを実施した結果、85%がアカデミック・ハラスメントについて「知らなかった」と回答しており、100%が研修を今後の大学生活に活かせると思うと回答していた。また、内容については、程度の差はあるが全員が「理解できた」と回答、理解が「難しかった」という回答は見られなかった。そしてハラスメントに実際に遭遇したことがある、という当事者は、ET学科11名（内、6名は友人に相談、5名が家族に相談）、PC学科は3名（内、2名は友人に相談、1名は相談経験なし）という結果であった。ハラスメントに関しては、年々、「相談しなかった」と回答する学生の数は減少しており、一般的に、被害に遭った場合の相談しやすさに変化が生じているようである。最後に自由記述においては、本年もまた、無自覚なハラスメントや国公立の大学での酷い事例への驚きについてのコメントが多く、アルバイトや学外サークル等でのトラブルについての关心の高さが明らかになった。また、ハラスメントという言葉は知っていたが、その種類や内容について初めて理解できた、すぐに相談に行くようにしたいと思う、友人にも教えてあげたい、と多くの学生から肯定的な回答が得られた（資料1）。

②に関しては、2020年9月の成績会議の前、午前10時30分から90分の教職員対象ハラスメント防止研修会を実施した。講師には社会保険労務士の畠田先生をお招きし、職場のパワーハラスメント防止のテーマで講義していただいた。新型コロナウィルス対策として、オンライン研修の形となったが、職員が学内でリモート参加が難しいため、職員の多くがフロアで聴講するハイブリッド研修となった。事前に全学への研修告知と、非常勤講師には個別に会の案内を配布した。その結果、出席率は専任教員の参加が100%と研修を開始して以来初めての全員参加となった。リモートで参加しやすかったからか、非常勤講師も13名（昨年度は3名）参加した。職員の参加は17名で、合計50名とこれまで最も参加者が多かった。講義を通じて職場のパワーハラスメントについての理解を深め、パワハラ防止法案や労働基準監督署に寄せられる相談の半数は解決せずに自分で抱え込んでしまう、ということ等がわかった。その後本学で起こり得るような事例を挙げて、それぞれをハラスメントの6つの型に分類した。パワハラは予防が大切であること、相手の気持ちを想像することや、アイメッセージで伝えることを学び、無意識に自分が加害者になっていないか振り返りのチェックなど実施した。非常にわかりやすい講義であった、と、参加者の100%が今後の業務や生活に活かせると思う、と回答していた。リモート中心のハイブリッド研修だったため、グループワークの時間を持てなかったのが残念であった（資料2）。

## （2）学生相談委員会

学内の相談体制を整えるために、まず、学生相談室の相談員の先生方や保健センターの今村先生との連絡会を実施した。春学期に3回、秋学期に2回実施し、それ以外にメールや電話で相談室の業務の実施状況について問題ないか、確認を行った。

また、相談の実施報告書のフォーマットを作成し、年度末書類として実施状況の提出を依頼した。

サポートルームStellaの広報のためのポスター作成、実施報告と年間の実施報告書を作成した。支援を要する学生の対応と、関係部署との支援会議、情報交換を行った。

## （3）その他（実施計画外の業務について）

① 新型コロナウィルスの感染拡大に伴い、コロナハラスメント防止のための啓発ポスターを作成し、学内に掲示した。

②以前ハラスメント防止研修会で講師を依頼していた御輿久美子先生のNPOが作成した動画を全学で共有した。リモートハラスメント等、新たに注意しなければならないことなどを学ぶことができた。

③ハラスメント相談窓口専用の受付メールアドレス（harass@kaisei.ac.jp）と、サポートルームStellaの相談窓口専用の受付メールアドレス（s.r.stella@kaisei.ac.jp）を開設した。

## C 【点検・評価】

### 1. <長所・特徴>

- (1) ハラスメント相談委員会は、2回の研修会がオンライン研修だったため、いつもよりも多くの学生や教職員の研修参加が可能となった。①については、前年度とアンケート内容を変更することで、アカデミック・ハラスメントを知らない学生が85%もいたことがわかり、研修実施の意義が再確認されたと言える。また、ハラスメントという概念が一般にも浸透しており、ハラスメントに遭遇したことがある、と回答した学生がこれまでで最も多い14名であったが、そのほとんどが友人や親に相談することが出来ていた。このようなことが世の中には存在すること、注意して巻き込まれないようにすること、遭遇してしまったらすぐに誰かに相談することが大切であること、そして、お互いを尊重する人間関係を構築することが重要ということを学んだと、学生の自由記述からわかり、全員が有意義な研修会であったと評価していた。②これまでではアカデミック・ハラスメントに偏っていたこともあり、前年度に、違う立場の専門家の意見も聞いてみたい、との意見が寄せられたため、今年度は職場のパワーハラスメントについての研修実施が可能となった。社会保険労務士という立場から、労働基準監督署や法律というこれまでとは異なる視点でお話いただき、日常の自分自身のハラスメントについて各自が振り返る機会となった。パワハラを6つの型に分類して考えることで、注意すべき点が認識しやすくなることや、無自覚に加害を行わないためのチェックリスト等、わかりやすくなる研修内容であった。全員が有意義な研修会であったと評価していた。
- (2) 学生相談委員会は、学生相談と学修支援という2つの相談窓口を結びつけ、学生にとって、大学生活をより充実できるように支援することを目指す部署として設置された。心理的な問題を抱えている学生の学修面が遅れること、また、学修面でのしんどさが心理的な不安定さに繋がることは当然生じてくることであり、配慮の必要な学生が、メンタル面そして学修面の両方のサポートが受けられるよう関係部署との連携が必要となる。本年度は2つの部署を、学生相談委員会の委員長が連絡会と報告書を通じて把握し、ニーズのある学生には2つの部署を両方利用できるように促し、より細やかな支援業務を行うことが可能になった。資料3より、本年度サポートルームStellaを利用する学生はこの3年で最も多く14名おり、そのうち退学者はゼロで、現在までに全員が卒業を目指して前向きな姿勢で努力をしている。退学に発展しかねない不登校ケースを減少させるために誕生した部署であるが、3年目の現在、その目的を果たせつつあるように思われる。

(資料3) 2020年4月から2021年2月のサポートルームStellaの実施状況

学生 no.	支援実施回数	実施後の状況	備考
1	12	支援継続	2021年最終年
2	7	支援継続	
3	13	支援継続	相談室連携
4	4	不定期支援	
5	2	不定期支援	
6	6	卒業研究提出	残り3単位
7	23	2021年3月卒業予定	
8	4	2020年9月卒業	
9	3	不定期支援	
10	7	リモート受講中	相談室連携
11	7		相談室連携
12	14	支援継続	
13	3	リモート受講中	
14	担任からの依頼・相談3	支援予定	

\*今年度は14名中ET学科の学生が1名と、利用学生の学科に偏りが生じていた。

\*支援対象者のうち退学者はゼロであった。

## 2. <問題点>

- (1) ①本年度はオンライン研修の実施であったため、通信状態が不安定な学生にとっては、DVDの音声が聞き取りにくい時間があったようである。また、②教職員の方でも、ミュートがオンにならない不具合が生じて、参加者の生活音がノイズとして発生し、講師の声に集中しづらかったという声もあった。また、②において、グループワークの実施が困難であった。
- (2) 相談委員長に学修面での相談をしつつも、支援の部署に繋ごうとしても、自発的には来室できない学生もいた。また、サポートルームStellaの利用状況を見ると、14名中ET学科の学生が1名のみであり、相談関係の資格をもつ教員がPC学科に集中していることなどでPC学科の学生は支援機関に繋がりやすいがETの学生にとって利用のハードルが高いことが示された。

## A 【改善点】

(1) 来年度もまた、同じような形での研修実施の場合、①聞き取りの問題があった場合は別途補講の機会を持つことを事前に学生にアナウンスすることや、②研修参加前に参加者全員にミュートオンの要請をした方がよいだろう。また、②において、オンライン研修でのグループワークは実施が難しいが、毎年、グループワークや、事例を挙げてのロールプレイ等を希望する声が多い。次年度もまた ZOOM 利用の場合は、ブレイクアウトセッションを利用するなどして、グループワークの実施を実現させたい。

また、ハラスメントについての文献を学生が利用できるように、図書館にも配置できるように準備する。

(2) 本年度は春学期がリモートワークだったこともあり、序盤の連携が難しかった。次年度は定期的な会議の実施が可能になるため、そこで十分な情報交換や支援方針の相談が行われるように促していく。

また、サポートルーム Stella については、ET 学科の学生の利用の可能性を高めるため、ステラワーク週間や、レポート作成のノウハウ教えます週間など、テーマと期間を限定してチラシを配布するなどして利用の機会を増やすなどの工夫を実施していく。

そして、学生相談室については、不登校が生じやすい 6 月 7 月の時期に、マンツーマン面接を実施した担任の先生との連携を強化し、短時間の枠でのカウンセリング月間を構想中である。

## 9. 入試委員会

### P 【目標】基準5-③

2021（令和2）年度入試において、両学科で入学定員を確保する。

### D 【現状説明】

本学では4年連続で入学定員を確保できた。しかし、18歳人口の急激な減少や共学志向など、本学を取り巻く状況はさらに厳しくなっているので、昨年に続き本年度も定員確保を目標とした。

今年はCOVID-19感染拡大により、当初計画していたような募集活動ができなかった。計画通りできた活動は以下のとおりである。

- ・大学案内、各種リーフレットの作成
- ・ホームページでの本学の内容紹介
- ・SNSを活用した副次的広報
- ・DMハガキを複数回送付、業者からも別に送付
- ・一斉メール（メールマガジン）の配信
- ・高校宛の一斉FAX(入試・オープンキャンパス情報)=月1回程度
- ・交通広告（山陽電鉄）
- ・来校者や進学相談会参加者に対応した教職員による礼状の送付。

COVID-19に配慮して行った活動は以下の通りである。

#### ・WEB上での進学相談会実施

業者主催の高校内ガイダンスや会場型ガイダンスは軒並み中止となったので、受験生の相談機会を確保するために、本学サイト上においてWEB上で相談できるシステムを構築した。

##### ① WEB上のAO[KAISEI]入試事前面談実施

これまでオープンキャンパス時を中心に【対面】での事前面談を行ってきたが、外出機会が制限されている中、WEB進学相談のシステムを利用する形で、WEB上でAO[KAISEI]入試の事前面談ができる環境を構築した。

##### ②「おうちでオープンキャンパス」サイト開設

4月のオープンキャンパスや、5月の教員対象説明会が軒並み中止となる中で、入試制度の説明や学校紹介を見る機会を作るため、本学ホームページ上に「おうちでオープンキャンパス」ページを創設。各種動画コンテンツを中心に、最後はWEB進学相談ができるように整えた。

##### ③ 在学生スタッフとの交流実施

オンライン上で在学生スタッフと交流できる機会を設定し、高校生、保護者等の

来場者及び本学学生の感染防止に努めながらも、本学の「超小人数」教育を在学生のことばで説明する機会を設けた。

・オープンキャンパス

以下のように感染防止に配慮し、夏期を中心に7回、それに加えて個別相談型オープンキャンパスを開催した。

- ① 春のオープンキャンパスは中止。
- ② 来場者数を抑え、3密環境回避

これまで10時～15時30分まで通し開催していたものを、午前・午後の2部開催制にし、さらに「事前予約制」として来場者の事前確認ができる体制を整備した。

また、予約人数にも制限を設け、短時間でかつ少人数で実施した。(午前・午後各学科10名。1日最大40名)

- ③ 来場者の検温及び消毒体制の整備

来場者全員に、受付で検温及び手指消毒を実施。学内各所に手指消毒ジェルを配備。受付など来場者が着席した座席において、使用後のアルコール消毒を徹底した。

- ④ ソーシャルディスタンスの徹底

各相談ブース間において2メートル以上の間を空け、面談者と相談者の間に飛沫防止パネルを設置した。

・土曜進学相談会（祝日や入試開催日を除く）

指定した土曜日に学内で進学相談会を行った。教員1名職員1名を配置して、来校した高校生および保護者に対応した。それ以外の曜日も希望者があればアドミッションセンターを中心に対応した。

今年度はCOVID-19の影響で、春学期は基本的にZoomを使っての説明となった。秋学期は対面での対応を中心とし、遠隔地の場合など希望があればZoomで対応した。

・高校等での進学相談会・出張授業（147件）

・高校訪問（全教職員で1校につき複数回）

これらについても感染拡大防止に配慮し、訪問校の先生と相談しながら、慎重に行った。

中止せざるを得なかつた計画

- ・5月後半から6月初旬に開催予定であった高校・予備校・塾教員対象入試説明会＝年4回（本学2回、大阪1回、姫路1回）は、緊急事態宣言が4月7日に発令され、いつ解除となるか分からなかつたため中止せざるを得なかつた。

以下のような多様な入試日程を設定した。

- ・AO [KAISEI] 入試（I期～IV期）
- ・指定校推薦（1次、2次）
- ・自己推薦（A～C日程）
- ・自己表現
- ・学校推薦Ⅰ・Ⅱ
- ・一般入試（前期A・B日程、後期A・B日程）
- ・大学入学共通テスト利用（I～Ⅲ期）

I期で、2科目型、3科目型を設定

入学試験実施をめぐっては、COVID-19 感染防止対策として、以下の対応を行った。

① 受験者の検温及び消毒体制の整備

受付で検温及び、手指消毒を実施。面接待合室前など学内各所に手指消毒液を配備した。

② 面接待合室においてソーシャルディスタンスの確保

受験生同士一定の距離が保てるよう、控室座席を全席指定に。面接開始時間に合わせて、受験生の受付時間を変更し、面接控室が密になることを避けた。

③ 面接室での換気対策

面接室の窓は常時開放し、空気の循環ができるように環境整備。

④ コロナ罹患者及び、当日体調不良者への追試験対応

試験当日に風邪のような症状、又は 37.5℃以上の発熱があり、試験開始時間までにアドミッションセンターに連絡があった受験生に対し追試験を認める措置を設定した（要申請書提出）。

⑤ その他（調査書の取り扱いについて）

点数化する予定であったが、評価を【参考程度】に変更した。

入学生を確保するため、以下のような授業料免除、奨学金制度を設定した。

・英検2級相当以上の資格を有する入学者に授業料免除制度

資格のスコアに応じて1年間または春学期、春学期の半額の授業料を免除する。

・奨学金給付制度

指定校推薦、学校推薦Ⅰ・Ⅱ日程の専願受験者で奨学金給付生試験の受験者各学科1名の成績優秀者に、入学年度の春学期及び秋学期の授業料等の半額相当額を給付する。

・入試成績優秀者奨学金制度

一般前期A日程で学力検査の得点率が80%以上の受験者、大学入学共通テスト利用I期で学力検査の得点率が70%以上の受験者に入学年度の1年間の授業料及び施設設備費を免除する。

・入学会員免除制度

指定校推薦および自己推薦A、自己表現、学校推薦Ⅰ・Ⅱの専願者で同窓生子女及

- びカトリック系高等学校出身者を対象として入学金を免除する。
- ・大学入学共通テスト利用Ⅰ期の3科目型志願者で学力検査の結果が得点率70%以上の志願者すべてに入学金の一部（10万円）を免除する（入学後の返還）。

以上のような奨学金制度、入学金免除制度を設け、入学者増をはかった。

#### C【点検・評価】

オープンキャンパスは、先述のように4月末開催予定を中止にせざるを得ず、またそれ以降は予定通り開催したが、参加者が集中することを避けるため予約制としたことで参加者は前年度に比べて激減した。参加者186（昨年368）名、保護者等が140（昨年262）名。なお、土曜進学相談会での来校者は3（昨年26）名であった。オープンキャンパス参加者の約3割が受験に結びついている本学としては、大きな打撃であった。

そのため、志願者も同様に激減した。英語観光学科は71（昨年144）名、心理こども学科は68（昨年92）名、全学で139（昨年236）名、合格者は英語観光学科66（昨年134）名、心理こども学科67（昨年82）名、全学で133（昨年216）名であった（資料1）。※編入学含む

本年度は入学者定員を確保することができず、入学者は81名（昨年109）で英語観光学科40名、心理こども学科41名で、充足率は84.2%となった。昨年度と比べれば、25%減である。

#### A【改善策】

今年度はCOVID-19感染拡大の影響で、計画通りに学生募集活動が行えなかった。とくに、オープンキャンパスが通常通り開催できず、来場者が半減してしまったことで、本学の特徴や長所を多くの受験生や保護者に体験してもらえなかつたことが、この結果につながったと考える。

学科別では、英語観光学科の入学生がほぼ半減してしまった。これはCOVID-19感染拡大によって観光業が大打撃を受けたことによるのであろう。しかし、ワクチンや治療薬が開発され、COVID-19の問題が収まりさえすれば、観光業も復活することは間違いない。来年度以降は今年のようなことはないと思う。近年、世界的に認知されている日本の文化や自然をアピールし、その良さを知ってもらうことの素晴らしさ、やりがい等をしっかりと広報し、受験生確保に努めたい。

一方、心理こども学科は前年度とほぼ同数の入学生を確保することができた。これは、保育士や幼稚園教諭などがCOVID-19感染拡大のような状況のなかでもあまり影響を受けず安定していることが見直されたのかもしれない。ただし、まだ定員確保に至っていないので、本学の「超小人数教育」やきめ細かな指導、また2020年度保育士と幼稚園教諭の実就職率が近畿女子大第1位であることなどを積極的に広報してさらなる学生確保に努めたい。

また、今年度は COVID-19 感染拡大のなかでどのような受験状況になるか不透明なため受験生が年内で進学先を決定したいという強い意向があり、例年よりも推薦入試での受験を希望する高校生が多かったようである。実際、受験者数は英語観光学科は昨年度の 49 に対して 43、心理こども学科が昨年度の 34 に対し 34、大学全体で昨年度 83 に対し 77 と微減で、入学者数は英語観光学科が昨年度 45 に対し 35、心理こども学科が昨年度 27 に対し 34、大学全体で昨年度 72 に対し 69 とほぼ同等であったのに対し、年明け以降は、一般入試の志願者は、英語観光学科では昨年 92 名が 27 名、心理こども学科では昨年 58 名が 34 名と、年明け後に行われる試験において受験生が激減している。このような傾向を十分に読み切れず、必要な対応ができていなかったことも学生を確保できなかった要因であろう。

来年度は、ここ数年減らしてきた指定校をもう一度見直して増やしていきたい。しかし、指定校とするだけでは受験生を送ってもらえないで、大学の学生募集経験者を高校訪問担当者として新たに雇用し、積極的に高校を訪問させて本学の建学の精神や特徴をアピールしていきたい。

資料 1 2021 年度 入試種別入試結果

資料 2 2016（平成 28）年度～2021（令和 3）年度 志願者・合格者・入学者数の推移

資料 3 大学通信 2020 年全国の高等学校の進路指導教諭が評価する大学

## 10. 宗教委員会

P 【目標】 1-①、1-②

学生が少しでもキリスト教的精神に触れる機会を設ける。

D 【現状説明】

1. 本年度のキリスト教関連行事について、また2. 学校行事以外の活動の実施について報告を行う。

1. 本年度のキリスト教関連行事について

令和2年度は新型コロナウィルス感染防止のため、キリスト教関連行事の多くが中止、または実施形式を変更して行われた。

① 春学期中に開催予定の1年次生の新入生オリエンテーションに含まれる宗教行事（聖堂オリエンテーション、ミサの理解、5月に予定されていた新入生オリエンテーション

2 大塚国際美術館見学）は全て中止された。その代わりとして、12月に自主研修用図書として全員に、シスター渡辺和子著『置かれた場所で咲きなさい』を配布し、キリスト教的な考え方方に触れる機会を設けた。

② 5月に予定されていた2年次生のキリスト教研修1（カトリック夙川教会）も中止となった。その代わりとして、自主研修用図書として英隆一郎著『イエスに出会った女性たち』を全員に配布し、聖母マリアや、聖書に登場する女性たちについて学ぶ機会を設けた。

③ 同じく5月に予定されていた3年次生のキリスト教研修2（布引ハーブ園）も中止となった。その代わりとして、自主研修用図書としてカトリック中央協議会出版部著『すべてのいのちを守るために～教皇フランシスコ訪日講話集』を全員に配布し、教皇フランシスコが日本の若者や上智大学の学生に発信したメッセージを通じて、本学の守護者の一人であるアッシジの聖フランシスコの精神に触れる機会を設けた。

④ 10月に例年宿泊研修として実施されている4年次生対象キリスト教研修については、学生の安全を万全に期するため、オンライン利用による1日研修の形で行った。講師は昨年同様、三輪久美子先生で、テーマは「与えられたいのちを生きる-喪失から生きる意味を考える-」であった。本年度はコロナによる喪失体験とその影響と対策を研修内容に追加した。研修を補足するために、4年次生にも自主研修用課題としてシスター鈴木秀子・原邦男著『なぜ、私たちは新型コロナウィルスを与えられたのか？』を全員に配布した。

⑤ 11月にタベのミサを、完全予約制、20名までの入場制限で実施した。司祭は六甲教

会のセゴビア神父様で、奉納は取りやめ、歌もアクリル板設置の上で学生1名による独唱で実施した。学生3名、その他の希望者15名の参加があった。

- ⑥ 12月のクリスマスミサ、クリスマスキヤロル、ドーナツパーティも全て中止となった。クリスマスミサの代わりに、神戸中央教会のボボン神父様によるクリスマスマッセージを、クリスマスキヤロルの代わりに、音楽部によるトーンチャイムと教員有志によるクリスマスキヤロルのメドレーの動画を、それぞれQRコードにしてクリスマスカードの裏面に印刷し、全学生と教職員に配布した。また、ドーナツパーティの代わりに、海星のロゴとメリークリスマスの文字をプリントした焼き菓子を全学生と教職員に配布した。また、教職員有志による教職員のためのささやかなクリスマスの音楽の集いが聖堂で教授会後に短時間で行われた。
- ⑦ 3月に4年次生対象卒業感謝ミサの実施を予定している。司祭は六甲教会のセゴビア神父様、会場は講堂で行う。その後、同窓会入会式と卒業式練習を予定している。卒業式は、個別の卒業証書授与を割愛した形で実施予定である。オンライン授業受講の学生のために、式典の様子を録画し、後日動画を配信予定である。

## 2. 学校行事以外の活動の実施について

- ① 本年度の海星協力金は、春学期はオンライン授業のため、学生からの募金は集めず、教職員からの募金を神戸医療従事者ファンドに寄付した。また、秋学期も、学生の家庭の経済状態の悪化やアルバイトが出来なくなっている状況に配慮し、募金は一律500円ではなく、任意とした。秋学期の海星協力金の一部をサンタ募金とし、その他を、引き続き神戸医療従事者ファンド、そして、国境のない医師団、ミンダナオ図書館等、毎年の送付先に振込予定である。
- ② 12月に昨年度から開始したサンタ募金の配布のため、ボランティアの学生11名と灘区内の3か所の児童養護施設を訪問した。感染防止対策に十分に配慮を行いながら、今年度の状況を考慮したささやかな贈り物となったが、クリスマス会も中止となっていた施設からは、ボードゲームのプレゼントを子どもたちが大変喜んだという礼状をいただいた。
- ③ 1月に昨年度から始めたミッションシネマの会を実施した。春学期はオンライン授業のため、実施は出来なかった。秋学期は『石井のお父さんありがとう』という日本の児童福祉の先駆けであった石井十次氏の生涯を描いた作品を観聴した。学生が20名程、教職員は2名の参加があった。
- ④ 春休み中に図書館に、キリスト教関連の図書とDVDを購入し配置予定である。

## C 【点検・評価】

### 1. <長所・特徴>

本年度のキリスト教関連行事については、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、その多くを中止・実施形態を変更せざるを得なかつたが、全ての行事を中止するのではなく、宿泊研修を一日のみのオンライン研修の形で実施し、自主研修図書の配布や動画配信という安全、安心な形で実施することが出来た。図書については、読んでみたいと言つてきた学生もいた。クリスマスの焼き菓子は学生に歓迎され、クリスマス用の動画は多いもので200名程度が視聴していた。クリスマス行事は通常であれば主に一年生対象に行われるものであるが、今年度はその倍の人数が動画を視聴したことになり、より多くの学生の参加が得られたと言える。

また学校行事以外の活動の実施の中では、学生からの意見を受けて、春学期の海星協力金の学生の募金を中止し、教職員の募金を、神戸の医療従事者ファンドに寄付することができた。海星協力金の開始の経緯が、学生の発案であったことから、今年は特に学生の意見を反映することで、大学ではなく、自分たちで行っている活動であるという意識が高まつたのではないかと思われる。秋学期の海星協力金も、学生の経済状態に配慮して、任意の寄付を募ったが、ゼミによっては全員が500円を寄付したクラスもあった。また昨年度よりも多くのサンタガールズが集まり、児童福祉施設に寄付を届けることができた。「子どもたちの実際の様子を知れば、きっとみんなもっと何かしたいと思うはず」と言った学生もいた。

### 2. <問題点>

4年次生については、実施時期が10月だったため、オンラインの形でキリスト教研修を実施することが可能であったが、その他の学年の研修時期は5月の半ばであり、研修をオンラインの形で実施することも困難であった。そのため、自主研修図書の配布を行つたが、4年次生の研修のように、学んだ振り返りをアンケートで把握することなどもできず、自主研修の学びの効果は学生の自主性頼みとなってしまった。新入生に対し、通常春学期に実施するその他のキリスト教のオリエンテーションも実施できないままであった。12月の行事日に、新入生だけでも、オンライン研修の形で聖堂オリエンテーション等を実施してもよかつたかもしれない。

また、キリスト教の文献やDVDを選ぶのに時間がかかってしまい、今年度秋学期終了時点で図書館での配置が間に合わなかつたため、学生が図書を手にする機会を逃してしまつた。

## A 【改善策】

未曾有の状況にあり、準備していた研修や行事を例年の形で実施することはできなかつたが、本年度の自己点検・評価の目標のとおり、「少しでも」キリスト教的精神に触れる機会を持つことはできたと考える。しかしながら、その機会を学生がどのように利用したかを把握する手段を今年度は設定することが出来なかつた。

2020 年の入学生に実施できなかったキリスト教オリエンテーションを補てんするために、2021 年度の 5 月の研修では、前年度予定していた「ミサの理解」を本学聖堂で実施する。そして、それ以外の学年についても、2021 年度は図書の配布ではなく、安全・安心な形での研修の実施の方法を模索し、何らかの形で学生が学びを自己評価し振り返ることが出来る手段を設けることとする。2020 年の 2 年次生には配布予定であったメダイを本年度中に準備し、次年度の研修で配布する。2020 年の 3 年次生には、次年度の研修の中に、3 年次のテーマである「アシジのフランシスコの人生」や、「自分の人生の役割」という視点を何らかの形で追加するようにする。

なお、手配中のキリスト教関連図書と DVD は入荷し次第図書館にコーナーを準備して、展示できるように協議していく。

## 11. 図書委員会

### P 【目標】基準8-③

学修に必要な図書・資料を整備し、館内環境を整え、展示やレファレンス等を通して学生の利用をサポートする。

### D 【現状説明】

#### (1) 図書・資料の整備

教科書・指導書コーナーとキャリアコーナーの図書・資料の整備を実施した。

- ① 教科書・指導書コーナーは、過年度版403点を地下書庫に移動し、令和2年度版の小学校教科書154点と指導書240点を受入・登録した。
- ② キャリアコーナーは、TOEICの新テスト対応の新版を中心に29冊のタイトルを受入・登録し、25冊を除籍した。

#### (2) 館内環境の整備

C O V I D-19 感染拡大防止対策を継続して館内環境を整え、図書館利用をサポートした。

- ① 入館時にはアルコール消毒・マスク着用等についてチェックシートの記入、館内の声掛けを実施することで感染防止対策の徹底に努めた。
- ② ガイダンスやレファレンス等は、距離を確保した座席設定と案内、遮蔽板設置、換気の強化で感染予防対策を講じて実施した。

#### (3) 展示やレファレンス等の取組み

展示・レファレンス・ホームページ・QRコードを活用し、学生の利用推進を図った。

- ① 展示は15回実施した。定期企画展示は「先輩が卒業研究に役立てた本」など3回、特別企画展示は「大学生活を図書でパワーアップ！」など3回、季節の絵本は「春を待つ絵本」など5回、テーマ展示・学修支援展示は「星に想いを馳せる本」「施設実習に備える本」など4回である。
- ② レファレンスはメール・電話でも実施し、学生の図書・資料の利用をサポートした。
- ③ ホームページは展示テーマや展示図書の紹介を強化し、各学科の『情報検索ガイド』を掲載した。
- ④ 「返却カード」にQRコードを表示し、ホームページへアクセスして図書館の取組みが確認できるようにした。

### C 【点検・評価】

#### <長所・特色>

- (1) 教科書・指導書コーナーとキャリアコーナーを整備し、教職課程やTOEIC対策の学修の利便性が高まるようにした。
  - ① 小学校教科書・指導書は、令和2年度版394点を整備した。動画やPDFファイル等については全資料の再生作業を行い、内容や利用方法を確認後配架した。
  - ② TOEIC対策本は現行新テストに対応するよう整備し、除籍した25冊はリサイクルフェアの対象として活用した。

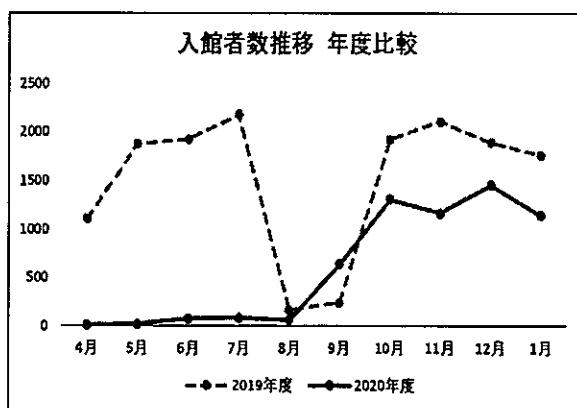
(2) 感染拡大防止対策を講じた館内環境を整備し、学修の場を提供できるよう努めた。

① 入館者は「学内利用者のみ」に限定し、展示の実施や利用サービスの強化により、

図書・資料の利用を推進した。2020年度の入館者数は表1のとおりである。

2019年度の入館者は、学外利用者(生涯学習講座受講者等)を含む数値である。

(表1)

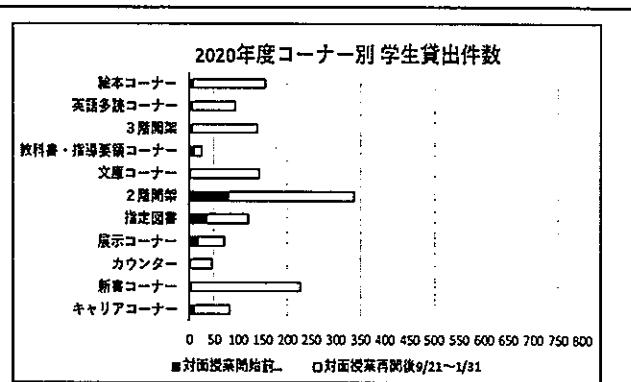


月	入館者人数	
	2019年度	2020年度
4月	1106	13
5月	1877	22
6月	1925	76
7月	2181	85
8月	167	64
9月	243	642
10月	1929	1308
11月	2111	1167
12月	1894	1456
1月	1763	1143

② 学生の貸出件数については、4月1日から対面授業再開前日の9月20日までと、対面授業を再開した9月21日から1月31日までは表2のとおり推移した。9月21日から1月31日までの貸出件数を前年度同期間の数値(表3)と比較すると、新書コーナーは862%、展示コーナーは482%、指定図書コーナーは112%、2階開架は117%、文庫コーナーは304%、3階開架は283%、絵本コーナーは95%という結果であった。

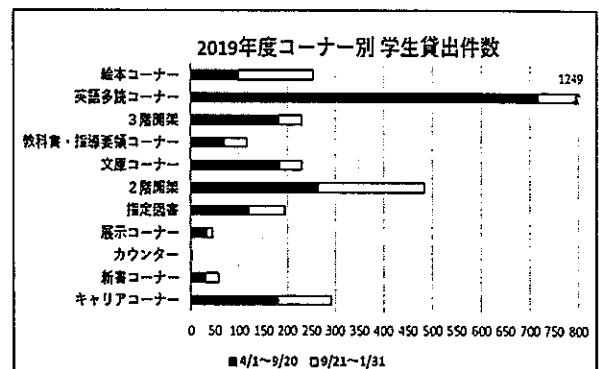
(表2)

2020年度	対面授業開始前 4/1~9/20	対面授業再開後 9/21~1/31
キャリアコーナー	10	72
新書コーナー	3	224
カウンター	2	44
展示コーナー	18	53
指定図書	36	84
2階開架	79	258
文庫コーナー	2	140
教科書・指導要領コーナー	9	16
3階開架	6	133
英語多読コーナー	7	87
絵本コーナー	8	147



(表3)

2019年度	4/1~9/20	9/21~1/31
キャリアコーナー	181	111
新書コーナー	31	26
カウンター	0	2
展示コーナー	33	11
指定図書	120	75
2階開架	265	220
文庫コーナー	184	46
教科書・指導要領コーナー	70	46
3階開架	183	47
英語多読コーナー	717	532
絵本コーナー	99	155

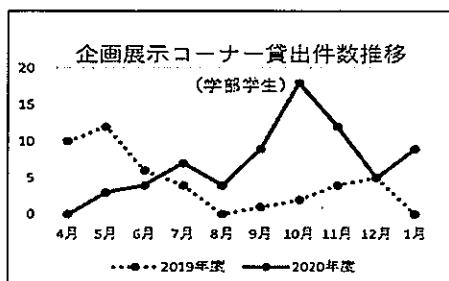


### (3) - 1

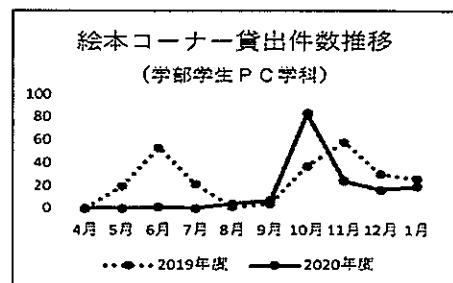
展示の実施とホームページでの紹介を強化し、学生の図書・資料の利用を推進した。

- ① 企画展示コーナーの貸出件数は4月1日から1月31日までの値で71件、前年度の44件の161%であり、大きく増加した(表4)。
- ② 「季節の絵本」の展示は、絵本の利用を推進した。また、11月に「絵本を語るブックトーク」を2回実施し、実習に向けた絵本選びをサポートした。心理こども学科の絵本貸出件数は4月から8月までは5件(前年度94件)、9月から1月までは149件(前年度155件)であり、9月以降回復した(表5)。(9月1日の心理こども学学科学生数は今年度143名、前年度159名である)

(表4)



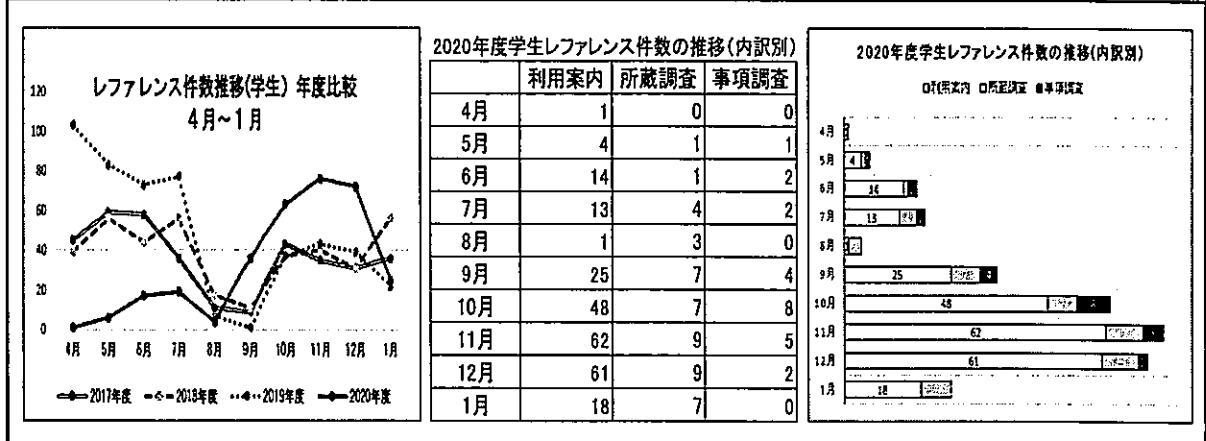
(表5)



### (3) - 2

対面授業再開後、レファレンスが急増した。4月から8月は47件(前年度比14%)、9月から12月は177件(同期間前年度比148%)で、9月から12月は2017年度から2019年度のいずれの年よりも多い件数であった(表6)。

(表6)



- ① 9月から1月までのレファレンス272件うち「利用案内」は214件で79%を占め、これは前年度同期間の「利用案内」109件の196%である。貸出や課題の取組みに関連した図書利用や館内パソコン利用等をサポートした。
- ② レファレンスと感染拡大防止対策が両立するよう発展させた「図書ラインナップサービス」を開始し、卒業研究に取り組む学生の図書・資料の利用をサポートした。卒業研究に必要な図書・資料を短時間で選び、継続的に利用して学びを深めていく学生の姿が見られた。12月31日までの利用状況は表7のとおりである。

(表7)

図書ラインナップサービス実施状況(レファレンスサービス実施日と図書ラインナップ冊数)

レファレンスサービス実施日 ()内は回数	学生の提示したテーマとその選択	ラインナップ冊数	館外貸出件数計	卒業研究に関する貸出件数と日付 ()内は日付
5/21,7/16	地方創生と地域活性化ー地域観光、地域創生、まちづくり	17	13	5(5/21), 2(6/18), 3(7/16), 3(8/13)
6/3,9/30,10/27, 12/22	オノマトペと名前一キャラクターのネーミング	7	22	2(6/12), 5(9/30), 3(11/10), 5(11/17), 1(12/1), 6(12/9)
7/28(2)	帯広地域まちおこし	6	6	3(7/30), 2(8/20), 1(10/21)
7/28	非行少年を取り巻く環境	12	7	7(7/31)
7/30	珈琲	14	4	4(7/30)
9/29,10/30, 11/9(2),11/11	奈良時代から室町時代の言葉の変化	12	37	8(10/5), 2(10/12), 3(10/19), 5(10/30), 2(11/9), 2(11/18), 3(12/15), 12(12/21)
11/12	映画のタイトル翻訳に対する文化の違いの影響	12	2	2(11/17)
11/17	リカちゃん人形はどうして保育の現場で使われないか	6	3	3(11/18)

※図書のラインナップと共に、提示した図書の補足や内容理解をサポートするレファレンスサービスを実施した。対象図書が少ない場合はデータベース「Japan Knowledge Lib」、Cinii文献、テーマに該当するウェブサイト等を紹介したり、居住地公共図書館の所蔵確認でサポートを追加した。調べ方のコツの伝達、自身の仮説が見つからない場合の図書の読み方を提案する等、図書利用方法の説明も行った。

## &lt;問題点&gt;

- (1) 「図書ラインナップサービス」を利用した学生が少なかった。卒業研究に取り組む過程で「図書ラインナップサービス」を6回、あるいは8回と継続した学生もいたが、このサービスを利用した学生は8名にとどまった。
- (2) C O V I D-19 の感染拡大が続く状況の中で、感染防止対策への学生の気の緩みが懸念される場面があった。

## A 【改善策】

- (1) 「図書ラインナップサービス」について、広報を強化する。このサービスは、レファレンスと感染拡大防止対策が両立するよう考案した取組みであるが、開始は年度の途中であった。2021年度は4月から広報し、利用者を増やしていきたい。
- (2) C O V I D-19 の感染拡大状況を見据えて館内全体の環境を維持し、安心・安全な図書館利用ができるよう、感染予防対策の徹底を継続していきたい。

## 12. 生涯教育委員会・地域交流委員会

### P 【目標】基準9-③

社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。

### D 【現状説明】

本学では、神戸市との連携講座である、「神戸市老眼大学」「こうべ生涯学習カレッジ」を担当しているが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、神戸市が中止を発表したため、担当は来年度への延期となった。

また、本学では、大学教育の地域還元という位置づけで、毎年学内において、公開講座と生涯学習講座を開講しているが、これらも、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。

外部依頼の講演としては、明石市教育委員会4件、明石市市役所4件、神戸市（幼稚園1件・神戸文学館2件）、宝塚市公民館1件（10回）などを、本学教員が担当し、延べ約940名の来場者があった。（3月7日現在）

10月以降に学内で行われた「海星子育てひろば『ステラマリス』」については、参加親子を11組に減らして5回（例年は15組6回）の実施を行った。また、「海星子育てひろば」は、「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成金」の交付をうけ、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進・子育て等に関する相談、援助の実施・地域の子育て関連情報の提供・大学の子育てに関する専門的な知識を地域に役立ててもらう場とする」ことを目的として活動し、報告書をまとめている。

さらに、本学学生の学修成果としては、神戸市立美野丘小学校での「キッズイングリッシュ」出張授業（4回）、新聞・雑誌への意見文掲載（4件）などがあった。また、クラブ活動としては、プアーニの灘区総合芸術性への参加、イラスト部の六甲病院でのアートセラピーボランティアなどの活動があった。

### C 【点検・評価】

社会連携・社会貢献の適切性を考慮したとき、参加者の安全確保は最優先事項となる。そのため、新型コロナウイルス感染拡大防止の方法が確立する前に実施の有無を決定する必要があった本学の公開講座・生涯学習講座を中止した。

10月以降に学内で行われた、本学心理こども学科が地域の子育て支援を行っている「海星子育てひろば『ステラマリス』」では、2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策のため、検温を参加親子、指導教員、参加学生ともに行い、体調管理表に記録した。手指の消毒とマスク着用を徹底し、実施中も常に体調を確認した。会場は、密を避けるため、定員を減らした上で、広い教室を複数用意し、窓は全開とした。玩具など

の備品も毎回消毒を行った。「海星子育てひろば」の実施により、新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策を徹底することで、安全な社会連携・社会貢献も可能となることがわかった。

#### D 【改善策】

新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策を徹底することで、公開講座や生涯学習講座を次年度開催に向けて調整していく。そのことで、より安全な社会連携・社会貢献を可能にしていく。検温を参加者・講演者ともに行い、手指の消毒とマスク着用を徹底する。参加は予約制とし、会場は、密を避けるため、定員を減らした上で、広い教室を用意し、窓は全開とする。備品は毎回消毒を行う。

特に、生涯学習講座では、定員を 20 名から 15 名に減らし、開講講座の数を増やすことでも対応していく。具体的には、生涯学習講座では、通常 6 講座開講される語学講座や 2019 年度以前にも開講していた観光系講座 2 講座に加え、2021 年度には、新たに子ども学系の講座を 2 講座、児童英語系の講座を 1 講座開講する予定である。2023 年度までには、語学系講座も含めて 12 講座開講を目標に、大学の地域開放を進めていく。

## 13. 英語観光学科

### P 【目標】 4-④

フィールドワークや研修が十分に実施できない社会的現状において、授業その他で他の文化についての理解を深化させる機会を設ける。またその中で、課題を発見し、解決法について意見交換をしたり発表したりする場を設定する。

### D 【現状説明】

今年度は、以下のプロジェクトを取り組んだ。

#### ① 兵庫県神河町 活性化プロジェクト

3年次の観光系演習クラスで取り組んだ、兵庫県神河町の活性化プロジェクト（神河町観光協会協力）である。町の活性化提案に先立ち、2020(令和元)年9月末及び10月に行ったフィールドワークでは、観光体験チームと文化歴史チームに分かれて神河町の観光地を見学したり、観光資源の調査及びアクティビティ体験や、観光客・地域事業者の方対象のアンケート調査を実施したりした。12月6日に町役場で開催された「神河町魅力アップ提言報告会」において神河町の新たな魅力や観光面での改善点を報告し、名産のわらび餅に町花をあしらった新商品「名水わらびもちドリンク」などを提案した。報告会には、町長をはじめ町職員、観光ボランティアガイド、観光協会理事・事務局の方々が出席し、学生たちの提案に質疑応答や意見交換が行われた。

#### ② 記事投稿

社会と繋がることをテーマに、「日本語表現法」（1年次・必修）、「日本語文章構成法」（2年次・選択）の授業においてさまざまな媒体への投稿を課している。なお、これらの科目は共通科目であるが、必修科目の「日本語表現法」は学科別に行われた。

#### ③ 海外旅行企画

2年次の「海星学」の時間を利用して、グループに分かれて海外旅行企画を行った。これは「関空発『学生と旅行会社でつくる』海外旅行」企画（新関西国際空港株式会社主催・一般社団法人日本旅行業協会関西支部共催・観光庁後援）に応募するためのものだが、行き先・行程はもちろん、企画する旅行のターゲット層やそのターゲット層の旅行に見合った予算組み等、詳細に至るまでの調査・計画を学生が行う。

その他、学科の複数の学生が取り組んだ自他の文化理解を促す行事として、オンライン語学留学やフランスの高校生とのオンライン交流会がある（国際交流項目参照）。

### C 【点検・評価】

#### ① 兵庫県神河町 活性化プロジェクト

今回学生が提案した「名水わらびもちドリンク」は商品化され、2021(令和3)年3月末に開催される「神河町 春のスイーツフェア in ヨーデルの森」で販売されること

が観光協会から報告されている。町は今後、その他の提案についての具体的な検討をしていく予定だという。現場視察とアンケートによる実態調査・分析を通して町の課題を発掘し、その解決策を町長や観光協会の方々の前で発表し、高い評価をいただいたことは、学生にとっても大きな自信となり、一つの学修成果が得られたと言える。

### ② 記事投稿

今年度は、いくつかの投稿の中から、一般社団法人 言の葉協会主催 第11回言の葉大賞において、「壁」をテーマにした作文で本学科1年次生2名が入賞（28,528点の応募の内、個人賞139名）、また2年次生のエッセイが2点、朝日新聞の「声」欄に掲載された。一つのテーマに沿って自らの考えを文章にすることは、思考力や表現力を養うことに繋がるだけでなく、自分を見つめなおすきっかけともなっているであろう。

### ③ 海外旅行企画

現段階で予選結果は未通知である。旅行を企画するプロジェクトを通して、一つの旅行プランにさまざまな要素が絡み合っていることを学ぶことができた他、そのようにさまざまな側面から旅行を企画することに興味をもち、継続的に実践したいと考えている学生もいる。

上記プロジェクトの内、①・③については、12月に実施した学科の成果発表会である「第10回 KAISEI English and Tourism Festival」において発表を行い、他の学生が興味をもって聞いた。

## A 【改善策】

主体的な思考、調査、観察、議論、まとめ、発表などの過程を通して、学生の理解を深化させることができるだけでなく、学生が新しい分野に興味関心をいただき、自らさらに研究を進める可能性がある。COVID-19の影響により今年度は実施を断念したフィールドワークもあるが、コロナ禍にあってもゼミ程度の小グループでのフィールドワーク実施は可能であると考えられるため、次年度もいくつかのフィールドワークを実施する計画である。また、学内での学修においても、上記のようなさまざまな活動を取り入れる工夫をし、学生がより主体的に学修、研究をするよう促したい。特に、英語の学修と繋がる活動の方法について検討をする。

## 14. 心理こども学科

### 1. P 【目標】基準4-④

学生の学修を活性化させる授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。

### 2. D 【現状説明】

目標について4月3日の第1回学科会議で審議し、今年度は「学修の活性化」をキーワードとして授業改善に取り組むことに決定した。しかし、春学期は新型コロナ感染拡大のため対面授業ができなくなり、5月中旬から遠隔で開始することになった。秋学期は感染の広がりを懸念しながらも、最終授業日まで対面授業を継続することができたが、遠隔授業のみ、あるいは遠隔と対面を同時進行した科目もあった。

春学期の状況から、例年4月に実施していた1年次生への資格・免許状取得に関するアンケートは9月23日に変更した。また、今年度は1月20日に基礎ゼミでもアンケートを取ったので、学生の意向の変化を知ることができた。アンケート結果は次のとおりである。なお、2回目の結果は（ ）に記載しているが、1回目と同数であっても数名は取得したい資格を変更している。

保育士 24名（24名）、幼稚園 27名（27名）、小学校 10名（8名）、  
認定心理士 24名（5名）、公認心理師 6名（14名）

<対象は37名で複数回答有り>

例年のように幼保の希望者が多く、37名のうち34名（約92%）が幼稚園教諭または保育士を選んでいる。また、心理系希望者が増加していることが今年度の特徴である。

幼保のカリキュラムを編成し直したので、2年次生の8月から実習開始となる。実習では「先生」としての資質、あるいは「先生」になる本気度が問われる。1年次生のうちに進路を決定することになるが、迷っている学生もいるので一人ひとりに応じた適切な進路選択の指導が重要である。

### 3. C 【点検・評価】

学生の実態を把握し授業内容や授業方法の改善を図るために、各教員が1科目ずつ授業アンケートを実施した。春学期は2科目、秋学期は7科目である。また1年次5科目、2年次2科目、3年次2科目となっている。

- (1) 春学期1年次生「科目A」担当A
- (2) 春学期3年次生「科目B」担当B
- (3) 秋学期1年次生「科目C」担当C
- (4) 秋学期1年次生「科目D」担当D
- (5) 秋学期1年次生「科目E」担当E
- (6) 秋学期1年次生「科目F」担当F
- (7) 秋学期2年次生「科目G」担当G
- (8) 秋学期2年次生「科目H」担当H
- (9) 秋学期3年次生「科目I」担当I

次に、上記(1)から(9)の順に、D【現状説明】C【点検・評価】<長所・特色><問題点>A【改善策】について述べていくことにする。

#### (1) 1年次春学期「科目A」担当A

##### D【現状説明】

保育の基本を全般的に学ぶ授業である。入学して初めて学ぶ保育・教育であること

を考慮して、理論(講話・協議)＋実践(遊び歌の習得・発表)という授業形態を例年と  
ってきたが、今学期はオンラインでの授業となった。

そのため、実践部分では、遊び歌の習得・発表の回数を減らして、幼児の姿から学  
ぶという視点でDVDや園のHP動画の視聴などを取り入れた。

### C [点検・評価]

7月31日に授業アンケートを実施した。(履修者36名中、回答者35名)

R2 「科目A」アンケート集計		できている···4 ほぼできている···3 あまりできていない···2 できっていない···1				
NO	項目	7月(13回目・7/31)			36人中35人回答	
		4	3	2	1	計
A	シラバスに沿い、保育について様々な視点から学んできました。保育とは何か少しずつ興味がわき、分かってきましたか。	11	21	3	0	35
		31%	60%	9%	0%	100%
B	幼稚園・保育所・認定こども園について、違う部分や同じ部分が分かってきましたか。	9	22	4	0	35
		26%	63%	11%	0%	100%
C	DVDの視聴等を通して、子どもの発達が、年齢によって、個々に違うことが少しずつ分かってきましたか。	22	12	1	0	35
		63%	34%	3%	0%	100%
D	幼児教育・保育で使われる用語を少しずつ覚えてきましたか。	2	19	12	2	35
		6%	54%	34%	6%	100%
E	授業資料や「保育所保育指針解説」「幼稚園教育要領解説」などを読み返したりしましたか。	0	7	25	3	35
		0%	20%	71%	9%	100%
F	手遊びやわらべ歌に関心が湧き、もっと身につけたいと思うようになりましたか。	13	18	4	0	35
		38%	51%	11%	0%	100%
G	幼児教育・保育には深みがあります。「幼児理解」「先生の役割」などの重要性について、理解できるようになってきましたか。	10	22	3	0	35
		28%	63%	9%	0%	100%

### <長所・特色>

- ① 入学当初の授業のため、保育への興味関心が感じられるとともに、授業への参加態度は全般に良かった。
- ② 授業後の課題提出(メール)も100%であった。提出後、1~2日以内に個々の学生へ振り返りのメール返信に努めた。登校できない今までの授業であったが、個々の学生が教員とのつながりを感じるとともに、学びの確認ができ、次の授業回への意欲につながったと推察する。
- ③ オンライン授業のため、パワーポイントで新たに授業づくりをした。そのパワーポイント内に子どもの生活や遊びの様子を写真で取り入れたり、DVDを視聴させたりしたこと、「子ども」「保育」「保育者」を間近に感じ学び取ることができたのは良かったといえる。

### <問題点>

- ① オンライン授業のため、定期試験をレポート形式にした。やはり例年のような筆記試験を行い、厳しく着実な学びの確認を次年度からは行うべきである。
- ② アンケート回答の中では、保育について理解しているように見られる。しかしながら「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」等の理解は中々難しいのが現状であり問題点である。今後一層の授業の改善・工夫が必要である。

### A [改善策]

- ① 保育の基本を学ぶ上で、指針や教育要領の理解に基づく授業内容でなければならない。その点において、学生に理解しやすいように、視覚を通しつつ、理論を結び付ける授業の工夫が一層必要である。
- ② 保育を構想する力いわゆる指導案の作成は大学4年間を通して大きな課題で

ある。この授業においても、様々な保育指導案の提示等を次年度はぜひ取り入れていくようとする。

## (2) 春学期3年次生「科目B」担当B

### D [現状説明]

平常時の「科目B」の学修の一部である「ドキュメンテーション作成」については、環境教育・食育と兼ねて、野菜や草花を個人及び共同栽培する活動を取材源として作成経験を積むようにしている。保育現場では、保育ブログや学びの記録としてドキュメンテーションやラーニング・ストーリーを編集し、保育の公開・共有を進めているところが増えている。担任であれ、補助教員であれ、環境やある程度の予測を基にした子どもの変化を見逃さない姿勢が大切であり、継続した視点と撮影技術、編集技術が必要になる。子どもを撮影し教材とすることは難があるため、学生が好む植物を育てる中でこの基礎力を育成しつつ自然環境に親しむ経験を積むことを目標としている。しかし、今年度は遠隔での授業進行となつたため、共同栽培が不可能となり学生の各家庭での実践を元にしたドキュメンテーション作成となつた。

### C [点検・評価]

#### <長所・特色>

①遠隔授業のため学生の住宅状況に即して「夏野菜」「実食する」という条件で種子や苗から育成することとした。学内の花壇では土作りから参加していたが、学生の希望を聞いてみると「キノコ」「ハーブ」の希望があり育てるものも環境も多様であった。[ミニトマト(玄関)・エダマメ(ベランダ・プランター)・キクラゲ(室内)・キュウリ(祖母の畑)・パクチー(ベランダ・植木鉢)・バジル(ベランダ・植木鉢)・ディル(ベランダ・植木鉢) ]

②授業の開始15分程度、送信された植物の写真を見合つたり気象情報を伝えたりしながら栽培活動を進め、必要な世話や撮影のタイミングについて指導した。

③ドキュメンテーションは2回作成し発表し合い、今後の編集に生かすようにした。

④グーグル・フォームによる調査を実施し各自の学修の状況を客観的に把握した。

⑤学生は自分で選択した植物であり意欲は高く自分しか守れないという気持ちで育っていた。また遠隔授業でパソコンの使い方が上達し「こんな風に編集したい」という具体的な方法を求める相談も多かった。

#### <問題点> (表1参照)

①各家庭の実情に合わせた活動であったため「これでいいのか」という疑問を持ちながらの栽培であった。保育では幼児がハーブを栽培することはほぼ無いため、許可はしたもの、成育に変化が無さ過ぎて写真撮影の楽しさが減少したと考える。

②画像を共有した話し合いで、部分と全体を見ることが必要であった。全員収穫できたが、追肥や支柱のタイミングを指導するのに1週間のスパンは長過ぎた。共同栽培ではなく、共通した植物もないため成長のスピードに1カ月の差が生じ、ドキュメンテーション作成に間に合いにくい作物があった。(ハーブ系は1カ月で収穫が可能になった)

③わかりやすいドキュメンテーションを作成しようとイラスト画像を多用する傾向があった。自筆のあたたかさや色使い(ずっと緑色のままの作物もあったので)に配慮が必要であった。

### A [改善策]

①個別の作物の場合、成長に変化が見られるものや生育期間についても条件として付けくわえること。ベランダの場合、室外機や日照、水はけについて確認し、鉢の容量や材質、土の質について、個別相談の時間をとり準備をすること。

- ②共通の作物も加えると遠隔でも一体感が得られ、撮影のタイミングを知らせ指導もしやすい。また、学生同士の会話も弾み課題解決が促されることが予想される。
- ③先輩や友人のドキュメンテーションを見るのは意欲的であり、オリジナルを作りたい気持ちになる一方、イラストの使用が増え「何を伝えたいのか」目的が薄まる可能性を指導する必要がある。観察日記にならないよう栽培活動全体を取り巻く出来事を考慮し、ポイントを絞るように指導を継続しなければならない。
- ④育て方に疑問をもった学生が、直接販売会社に尋ねて解決したという出来事があった。販売会社は大変好意的に受け止めてくださり、さらに別の栽培商品をいただいたとのことである。遠隔授業で、孤独な実践の中、情報が欲しくて、咄嗟に業者に連絡をとったと思われる。保育現場でも、専門家に依頼することはあり正しい情報を得ることの大切さ、「命」を育てているため枯れないよう早めに手を打つことの大切さを学ぶ機会となった。

(表1) 学修評価アンケートから抜粋(受講者7人)

(4:大変該当する 3:該当する 2:余り該当しない 1:該当しない)

質問	4	3	2	1
⑦栽培活動を経て、他の植物へ興味や関心が高まりましたか	4	3	0	0
①栽培活動で誰かと話したり見てもらったりしましたか	3	3	1	0
⑨栽培活動で追肥・支柱の世話をしましたか	1	2	0	4
⑤栽培活動で害虫駆除の世話をしましたか	1	1	3	2
⑥栽培活動を写真記録することは負担でしたか	0	0	0	7
⑧気付きの文章化では相手を意識しながら表現しましたか	5	2	0	0
④ドキュメンテーション作成で知識・技術・気付きが高まりましたか	3	4	0	0
⑩ドキュメンテーション作成の為に写真は十分ありましたか	5	2	0	0
⑪最終のドキュメンテーションの出来栄えに満足していますか	2	5	0	0

### (3) 秋学期1年次生「科目C」担当C

#### D [現状説明]

「科目C」での重点を乳児期・幼児期・児童期として、エリクソン、ピアジェの理論を理解できるように資料だけではなく、改作事例を多く用いて実践に役立つよう工夫した。

パワーポイントはキーワードのみとした。41名のソーシャルディスタンスを考慮した座席（アセンブリホール）では後ろから見えにくいことやホワイトボードに大きな字で補足することで、書きながら理解を深めていくことを願った。

#### C [点検・評価] アンケートより

※中間期11月、最終期1月 表示サンプル数 (11月)=38 (1月)=38

##### (1) 11月の設問1

・講義内容は理解できましたか。

##### (2) 1月の設問1

・11月の要望で「双方向をもっと取り入れてほしい」という意見を生かそうとした。

・講義内容は理解できましたか。

##### (1) 11月の設問2 『教育・保育に心理学を!』を軸にして授業を進めています。

##### (2) 1月の設問2 『教育・保育に心理学を!』を軸にして授業を進めています。

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない (できない)

ア 11月28人 1月32人 イ 11月10人 1月6人

<改善してほしいことがあれば書いてください>

<11月の意見>

- ・エリクソンについてはよくわかったが、ピアジェが少しスピード速かった。
- ・口頭で大切なことをお聞きするが、時々、早口でメモできないことがあった。

<1月の意見>

- ・書くことが多すぎてしんどかった。
- ・パワーポイントよりも、小学校から高校まで慣れている黒板指導がわかりやすかった。
- ・教育に心理学の知識は必要だと痛感した。また、「科目C」は自分の子育てにも有効だと思った。

(3) 授業内容は今後の自分に役に立つことがありますか。

ア 大いにある イ あるかもしれない ウ あまりない エ あるとは思えない

ア 11月25人 1月34人 イ 11月13人 1月4人 ウ・エは0

<改善してほしいことがあれば書いてください>

特になし

<長所・特色>

- ① 実務家教員の経験から多くの事例（加工）で専門用語を補足説明できたことはよかったですと言える。
- ② 書きながら理解を深めることを続けていきたい。

<問題点>

- ① 対面授業の学生とオンライン学生が混在していることから、オンラインの学生から意見を聞く回数が少なくなってしまった。

A [改善策]

学問がすぐに現場の実践に結びつくとは限らない。また、「わかる」と「できる」には表現できないほどのギャップがあるのも事実である。学生が15回の授業の中で、近未来の自分に何をどう生かせるのか定かではないが、「わかる」が少しでも多くなることで、今後の自分に役立てたいと考えてくれることを願っている。

オンラインの学生についての評価方法として、毎回の授業で「今日、わかったこと」「調べてみたいこと」など観点を示してレポートとした。さらに、本試験（参考資料）はビデオONにして、対面と同じ時間設定で行った。学生によっては、毎回レポートの評価も高く、試験の成績もよい場合等、一律2割減がふさわしかったかどうか検討する余地があるかもしれません。

(4) 秋学期1年次生「科目D」担当D

D [現状説明]

目標は、「科目D」の担当教員（2名）の相互性を再確認し、全ての学生に平等な授業を提供すると設定した。

「科目D」は、入学式の当日にクラス分けテストを行い、概ね入学前のピアノ習熟度によって初心者クラス①②から中上級クラス③④⑤（平成30年度から4クラス）に分けています。

「科目D1」は春学期、「科目D2」は秋学期、1クラスの人数は8～10名である。クラスの習熟度の違いから、授業の進度や学習する曲数に違いは生じるが、学修内容や指導方法は同じになるよう非常勤講師の担当教員と共同でテキストを作成し、改訂を重ね、毎年入念な打ち合わせをしている。

初心者・上級者は指導に時間を要するという理由で、平成26年度からは①②⑤を専任教

員D、③④クラスを非常勤講師が担当し、平成30年度からは非常勤講師の経験を積むという理由で、①②を非常勤講師、③④を専任Dが担当した。クラスの交代は行ったが、個人レッスンに重きを置く授業であることから、学生をよく理解し、指導を適切に行うために、同じ教員が1年を通して同じ学生を担当するというスタンスは大切にした。

令和元年度から2年次春学期に新規開講になった「保育内容の研究・表現（音楽）」の授業を行うにあたり、7.5回の科目ということもあり、できれば授業開始までに1年次生全員を認識しておきたいと感じたこと、また学生から初等音楽の2人の教員の評価結果が公平ではないという声が届いたこと、この2つの理由により、「科目D1・科目D-2」の担当を再び見直すことにした。つまり、「科目D1」から「科目D2」へ移行する際に、半期で担当を入れ替えることにしたのである。なお、令和2年度はCOVID-19感染予防により、春学期はオンライン授業での実施になり、アンケートを実施する際はこれについても学生の意向調査が必要であると感じた。従って、アンケートの質問は、「科目D1」と「科目D2」の担当教員の交代について、対面・オンライン授業の比較について、「科目D」全般の感想と成果・意欲についての3つの内容で実施した。

#### C [点検・評価]

アンケートの1回目は7回の授業が終了した11月10日、2回目はテスト終了後の2月1日、1年次生次「科目D」受講者全員を対象にグーグルのアンケートフォームを利用して実施した。回答率は31件、94%である。授業に対する意欲・成果等を比較するために同じ文言にした質問事項において、1回目と2回目の結果で差異は見られなかった。従って、実施回は度外視し、関連事項、2人の担当教員の交代について、授業に対する意欲・成果の3項目について点検を行う。

まず、COVID-19感染予防に関して、ピアノやキーボードはアルコール消毒ができないことから、手洗いと手指のアルコール消毒の徹底を求めている。①「手指衛生を守っていますか？」に、僅か1名のみ「時々怠る」と回答、あとは全員が「はい」であった。②「対面授業は、オンライン授業と比べてどうですか？」は、「友達に授業のことが聞ける」(23名)、「教員の指示がよく理解できる」(21名)、「授業内容がわかりやすい」(19名)、「質問しやすい」(16名)であった。しかし、オンライン授業時の方が、「練習の時間を確保しやすかった」との記述もあった。

担当教員の交代について、「問題がない」が30名(97%)であったが、「教え方が違うと感じた」が9名(30%)いた。違うと感じる点は、オンラインと対面という二極的な背景の違いがあるとしながらも、「授業のスピード感」「楽譜を指示通りに弾かせる厳格度」「コードの教え方」等が挙げられた。

授業に対する意欲としては、日々の練習時間が「4時間以上」20%、「練習していない」0%、「これからもさらにピアノの技術を高めたい」(100%)と示すなど、非常に意欲的で前向きであるといえる。

#### <長所・特色>

2020年度春学期は、COVID-19感染予防のため、オンラインの授業になった。「科目D」は演習が主である。しかもインターネットを介した場合、タイムラグも生じるので、音楽を学ぶツールには向いていない。しかし、今年の受講学生が非常に勤勉でまじめだったことに加え、半期で担当教員を交代したことが、秋学期に再び学生の気持ちを一新させ、甘えや弛みが少なかったという効果を生み、例年通り、いやそれ以上の成果を残すことができた。これは、1クラスの受講者数が、8名の超小人数の運営であることも大きなプラスの材料になっている。ちなみに1クラス8人という設定は、アンケート結果では100%の学生が満足をしていた。

#### <問題点>

2020年度は「海星☆音楽フェスティバル」が開催できず、その代案として準備していた1

年次生のピアノ発表会も開催できなかった。また、秋学期は対面授業を実施したが、歌が歌えない、大きな声が出せない、ソーシャルディスタンスを守らなければならない等、COVID-19 に対する様々な感染予防対策がどうしても授業内容に制約を加える。学生が存分に音を楽しみ、豊かな「表現」活動を展開するためには、負の要素が拭えない状況である。

#### A [改善策]

COVID-19 に対する様々な制約があっても、「科目D 1」「科目D 2」の主な目的であるピアノの個人技能を伸ばすための演習は実行することができる。この状況の中で「できることをしっかりと」と指導する必要性を感じている。しかも、1クラス8人編成は大きな武器である。この超小人数制が実現されている限り、少々の問題は乗り越えることができると考える。引き続き 2021 年度も、半期で担当教員を交代し、効果を確認するつもりである。そして、超小人数の特性を生かし、学生個々の性格・様子ができる限り把握し、担当教員同士で指導体制・内容の検討を重ねながら、丁寧な授業を提供していきたいと考える。

#### (5) 秋学期1年次生「科目E」担当E

##### D [現状説明]

①新型コロナ感染拡大状況により、秋学期の途中で遠隔授業になった場合を想定し、全授業のレジュメを1冊にまとめた「科目Eノート」と「日本語音読」を授業初回日に配布することにした。②「学修の振り返り」を書く時間を設定し、5人程度の振り返りを次回の授業で紹介した。③「生きること」に焦点を当てた絵本紹介の時間を設定した。④社会的距離を取りながら、3人グループでの意見交換や発表の時間を設定した。⑤途中から遠隔授業を希望した2名の学生には、別日に授業を行った。

##### C [点検・評価]

アンケートを 11月 25 日と 1月 27 日に実施した。

アンケート項目	1回目 33名 (11月 25日)	2回目 33名 (1月 27日)
1. 話し方や説明の仕方		
(1) わかりやすい	22 (66.7%)	26 (78.8%)
(2) どちらかというと、わかりやすい	9 (27.3%)	7 (21.2%)
(3) どちらかというと、わかりにくい	2 (6.0%)	0 (0%)
(4) わかりにくい	0 (0%)	0 (0%)
2. パワーポイントのスライドの文字の大きさ、スライドの速さ		
(1) これくらいの大きさや速さでよい	24 (72.7%)	22 (66.7%)
(2) どちらかというと、これくらいの大きさや速さでよい	4 (12.1%)	5 (15.2%)
(3)-1 文字をもっと大きくしてほしい	5 (15.2%)	1 (3.0%)
(3)-2 もっとゆっくり進めてほしい	0 (0%)	4 (12.1%)
(4) 文字を大きくし、スライドをゆっくり進めてほしい	0 (0%)	1 (3.0%)
3. 授業の進め方		
(1) これくらいの速さでよい	21 (63.6%)	22 (66.7%)
(2) どちらかというと、これくらいの速さでよい	10 (30.3%)	8 (24.2%)
(3) どちらかというと、もっとゆっくり進めてほしい	2 (6.1%)	3 (9.1%)
(4) もっとゆっくり進めてほしい	0 (0%)	0 (0%)

<b>4. 授業の内容①</b>		
(1) 今後、とても役に立つと思う	18 (54.5%)	24 (72.7%)
(2) 今後、役に立つと思う	12 (36.4%)	6 (18.2%)
(3) 今後、少し役に立つと思う	3 ( 9.1%)	3 ( 9.1%)
(4) 今後、役に立つとは思わない	0 ( 0%)	0 ( 0%)
<b>5. 授業の内容②</b>		
(1) とても関心を持つことができる内容である	16 (48.5%)	21 (63.6%)
(2) どちらかというと、関心を持つことができる内容である	14 (42.4%)	12 (36.4%)
(3) どちらかというと、関心を持つことができない内容である	2 ( 6.1%)	0 ( 0%)
(4) 関心を持つことができない内容である	1 ( 3.0%)	0 ( 0%)
<b>6. 授業で印象に残ったこと、参考になったこと</b>		

<長所・特色>

① アンケートの結果は1から5の項目について1回目も2回目も(1)と(2)の合計27名(82%)から33名(100%)と評価は概ね良好であった。

6の「授業で印象に残ったこと、参考になったこと」では、1回目は敬語や言葉の使い方についての記述が多かった。6の2回目では、「毎回の授業で振り返りを書くので、その日にどんなことを学んだかを整理することができた」「特に参考になったのは、礼状の書き方や話し方など来年から実習に参加するために必要不可欠なことを学んだ」「同窓会などの往復葉書の書き方がとても参考になった」「保育の仕事に就くにあたって、日本語を正しく理解し、使うことはとても大事ということを学んだ」「特に指導計画を書くときは、自分の字や言葉遣いに注意するなど授業で学んだことを心がけて取り組みたいと思う」など将来に向けての意欲を感じる意見が多かった。

② 絵本の紹介は好評であり、2回目のアンケートに「毎回、授業の最後に絵本の紹介をしてくださるのが楽しみでした。初めて知った絵本もあれば、昔懐かしい小さい頃に見た絵本もあって、いつも心が温まりました」との感想もあった。

また、1年次生に中学校英語二種の免許状取得希望者がいるので、4年次ゼミ生2名による英語と日本語の「スイミー」の読み聞かせを行った。なお、「スイミー」を選んだのは、倒置法の学修と関連しているからである。

③ 1冊にまとめた「科目Eノート」はレジュメの散逸を防ぎ、欠席者や途中で遠隔授業を希望した学生への対応がしやすかった。

④ 「学修の振り返り」は授業に対する学生の関心・態度を評価するだけでなく、教員が自分自身で授業を評価する参考にもなった。

<問題点>

① アンケートの2の項目では、「スライドをゆっくり進めてほしい」が、2回目では1名増えている。また、授業の内容②で(3)(4)の3人は2回目では全員(2)になっているが、授業の内容①では、(3)から変化していない。

② 授業のレジュメはレールファイルに挟み「科目Eノート」としたが、35枚用であったので、挟めない追加プリントがあった。

③ 前年度の「発声トレーニング」を島崎藤村や三木清等の作品の一部を掲載した1分間の「日本語音読」に換えたが、初見で読むことが難しいためか、反応が弱かった。

A[改善策]

- ① 「日本語音読」とレジュメの見直しを図り、授業内容をさらに充実させていく。
- ② レジュメだけでなく、授業で配布したプリントや「振り返り」も含めた一つの学修の記録とするために、レールファイルを50枚用に換える。

(6) 秋学期1年次生「科目F」担当F

D [現状説明]

- ① 新型コロナ感染症流行により、毎年行っていた実際体験としての保育所訪問ができないということもあって、できるだけ理解しやすいように、DVD視聴を多く取り入れて、実際に乳児の姿を目にする機会を増やすようにした。
- ② まとめのプリントを今まで作って渡していたが、春にしたオンラインの授業で、パワーポイントでの授業が分かり易かったので、対面ではあったが、板書するよりパワーポイントとプリントを毎回作り大切な事柄を記入方式にした。
- ③ 上記のことを踏まえながらその改善に努められるよう、11月と1月の2回アンケートを実施した。
- ④ 評価対象は「科目F」、評価対象学年は1年次生(28名)、秋学期実施。

C [点検・評価]

<アンケートの実施>

11月と1月に、授業アンケートを実施した。結果は次のとおりである。

1. 「科目F」の授業の内容は、理解できましたか？

	11月(授業中間時23人)	1月(授業終了時27人)
ア. 良く理解できた	16人 (70%)	22人 (82%)
イ. どちらかというと理解でききた	6人 (26%)	4人 (15%)
ウ. どちらかというと理解できなかつた	1人 (4%)	1人 (3%)
エ. 理解できなかつた	0人	0人

2. 授業の進め方で、話し方や説明の仕方は、わかりやすかったですか？

	11月(授業中間時23人)	1月(授業終了時27人)
ア. わかりやすかった	19人 (83%)	24人 (89%)
イ. どちらかというとわかりやすかった	4人 (17%)	3人 (11%)
ウ. どちらかというとわかりにくかった	0人	0人
エ. わかりにくかった	0人	0人

3. パワーポイント、DVD視聴、事例などが授業理解につながっていますか？

	11月(授業中間時23人)	1月(授業終了時27人)
ア. 繋がっている	20人 (87%)	27人 (100%)
イ. どちらかというと繋がっていない	3人 (13%)	0人
ウ. どちらかというと繋がっていない	0人	0人
エ. 全然関係ない	0人	0人

<アンケートの考察>

- ⑦ 授業の理解度については、1名を除いては理解できているとなっている。1月の方が、よく理解できている数値が大きく、11月より1月の方がより理解度が増していると思われる。この要因としては、毎回の授業時に、振り返りの時間を取っていたことや、パワーポイントとプリントを連動させて、大事なところを記入するようにしたことで、話を聞く姿勢もでき、理解度を増した要因であると考えられる。

また、DVD視聴、事例の出し方についても、説明の後つなげて実際の映像を見ることで、話と連動できたのではと思われる。

授業の進め方については、事例を多く取り入れたり、保育現場の映像を見せたりしたことと、大切なところは強調して話をしたりしたことが、理解につながったとみられる。DVD視聴については、後半100%が理解につながったとしている。

① 授業全般についての感想、要望については下記のような意見があった。

- ・乳児期の大切さ、養育者の対応の大切さがよくわかった。
- ・保育者にならなくても、将来に役立つことだった。
- ・子どもの発達過程をしっかり学べた。
- ・赤ちゃんの喜ぶあそびやかかわり方など実践的なことが学べた。
- ・DVD視聴で、赤ちゃんの可愛さがよくわかり、乳児への興味関心が増した。
- ・DVD視聴がとても分かりやすかった。
- ・DVD視聴の時に、補足説明をしてくれるのがわかりやすかった。
- ・授業が楽しかった。
- ・プリントが分かりやすかった。

#### <長所・特色>

- ⑦ 今回はコロナ禍で、実際の保育現場に行き乳児とかかわる経験ができなかつたが、その代わりに話したこととリンクする内容のDVDを選び、見せたことが学びに繋がったと思われる。
- ⑧ コロナ禍で、グループワークがあまり取り入れられなかつたが、全体で意見を聞いたり、一人でできる遊びを取り入れたりして、実践のことでもできるだけ取り入れるようにした。
- ⑨ いつオンライン授業になってもいいように、パワーポイントとプリントを作つて授業を進めたことが、書くことが多いが学びに繋がつていると実感する。

#### <問題点>

- ⑦ 最後の定期試験が、70%を占めるので、その時に、一生懸命覚えて、試験の成績は何とか合格点をとれるが、実際どこまで身についているか分からぬところはある。振り返りの小テストをその都度していくことが理解度を増すと考えられるので、実施したいが、15回の授業の中に組み入れるのはなかなか難しい。
- ⑧ 予習・復習をどのようにするかの話もしているが、実際している学生は少ないと思われる。小テストのことと考え併せて、やり方を考える必要がある。

#### A [改善策]

- ⑦ 実際に保育所現場を見ることやDVD視聴、事例をあげること、乳児のかわいらしさをどう伝え、楽しく保育ができるようしていくか、コロナ感染症が収まつたら、来年度はそれらを取り入れていきたい。
- ⑧ 準備学修がほとんど学生任せではできていないため、毎回授業の振り返りの時間だけではなく、確認テストを組み入れて予習復習をしっかりし、理解度を増すようにする。

#### (7) 秋学期2年次生「科目G」担当G

#### D [現状説明]

アンケートの結果を以下にまとめる。

全受講者 28名	第1回 2020年11月5日(26名)	第2回 2021年1月21日(25名)
1) 授業の理解度	1. わかりやすい (81%) 2. まあまあわかる (15%) 3. わかりにくい (4%) *理由: なんかよくわからないです…	1. わかりやすい (76%) 2. まあまあわかる (24%) 3. わかりにくい (0%) → 「レポート添削で理解が出来た」

2) 授業の内容	1. 満足 (65%) 2. 興味を持てた (35%) 3. つまらない (0%)	1. 満足 (72%) 2. 興味を持てた (28%) 3. つまらない (0%)
3) 授業の進め方	1. ちょうどよい (100%) 2. 速すぎる (0%) 3. 遅すぎる (0%)	1. ちょうどよい (100%) 2. 速すぎる (0%) 3. 遅すぎる (0%)
4) 教材・資料等	1. わかりやすい (54%) 2. 問題ない (42%) 3. わかりにくい (4%) *理由 文字がいっぱいで難しいです	1. わかりやすい (64%) 2. 問題ない (32%) 3. わかりにくい (0%)
5) 授業中の環境	1. 集中できる (50%) 2. 問題ない (50%) 3. 集中できない (0%)	1. 集中できる (72%) 2. 問題ない (20%) 3. 集中できない (8%) *理由: 前列がやかましい (2名)

① 第1回目のアンケート自由記述欄

- ・スクリーンに写っている（パワーポイントの）字がたまに小さくて読み（見え）づらい。
- ・レポート、細かく添削を書いて返却してくれて、改善点がわかりました。
- ・わかりやすくて楽しい、身になる授業と思っています（3名）。
- ・心理学の授業で、ほぼ初めてのレポートだったのですが、わかりやすい見本を頂けたので、なんとか終わらせることができたことが嬉しかったです。また、色々な心理学の検査ができて自分について深く考えるきっかけになりました。
- ・レポートを書くのはむずかしい。先生から事例をきくのがいちばん楽しいです。

② 第2回目のアンケート自由記述欄

- ・たくさんの心理検査ができて、自己分析を通じて自分を客観的に理解し、見直す機会になった。伸ばすべきところ、向いている職業等がわかった（6名）。
- ・友達とワイワイしながら検査をするのは楽しかったです（5名）。
- ・WISC検査が楽しかったので最後までやってみたかったです（2名）。
- ・内容は堅いですが先生が丁寧に教えて下さってとてもわかりやすい（6名）。プリントの内容が少し難しいので（2名）、自分で熟読しないといけないと思いました。
- ・事例から考えたり、学んだりしたことも印象深かったです。
- ・レポートの添削がきめこまかくてためになりました。ありがとうございました。
- ・教室が2つに分かれてしまった分、スライドや先生の話が聞こえにくいうことがあった。
- ・自己分析や子どもの発達を調べたり、保護者の対応など学びました。将来に生かせるよう、しっかりと知識をつけたいと思いました。

C [点検・評価]

<長所・特徴>

前年度の「心理学概論」では、「わかりやすい」という回答が5割程度であったが、今回は二度のアンケートともに7割から8割に増えており、少人数クラスや毎回のレポートに対するこまめなフィードバックの効果ではないかと考える。また、二度のアンケートの結果を比較して、授業後半の「授業の理解度」「教材・資料等」において、初回に「わかりにくい」とした回答、各1名ずつ（4%）が二回目では0%になっていた。返却したレポートのその添削が細やかでわかりやすかったとするコメントもあった。そして、自由記述にあった、スクリーンの文字の読みづらさについても、出来るだけ拡大して提示するようにし、文字が多くなるファイルについては別途資料を配布するなどの工夫をした。

<問題点>

「授業中の環境」に関して、前半は「集中できない」と回答した学生はいなかったが、後

半2名（8%）が前列の人がうるさかった、と指摘していた。通常、20名程度が受講するこの授業に、今年度は28名が参加していたこと、また今期は新型コロナの影響から、学生間のスペースをあけなければならなかつたことで、隣の準備室にも学生を着席させて2教室同時進行の授業となつた。その他3名のリモート受講の学生もいたために、通信トラブルが生じた時や、教室を移動しての説明時にざわざわとした時間が発生した。それでも前半は、実習で抜ける学生が多く、学生が適度に間引きされていたので問題は感じられなかつた。ところが後半は、ほぼ全員が授業に参加するようになつたことで、私語の多い学生が近くに座つてうるさく感じていた学生もいたようであつた。前半のアンケート結果で問題がなかつたことや、コロナ対策で座席を固定しなくてはならなかつたため、席替えをする等の対策を講じることが難しかつた。

また、2つの教室を繋ぐ出入り口に教卓を構えて2教室同時に講義を行つたが、充分な音声を届ける為に、準備室にはZOOM画面を立ち上げておいたものの、教員の生の声とZOOM画面を介しての声がズレて二重に聞こえるなど、一時、聞こえにくい状況が発生していたこともあつた。

その他に「教材・資料」の「わかりやすい」の割合が他の項目と比べて低かつた。資料の文字の多さや難しさは自由記述の回答でも指摘されていた。

#### A [改善策]

まず一つ目、「授業中の環境」を改善するために、学生が授業に関して気が付いたことを気軽にコメントできるようなミニアンケートを複数回実施することが考えられる。次年度は席替えを実施することを初回のオリエンテーションで告知しておくとよいだらう。その時に、私語が増えそうな環境にならないようにミニアンケートによる学生の意見を活用したい。また、次年度もリモート参加の学生がいることが想定される。その場合、通信の不具合に対応している間に、短時間自主学習できる教材を毎回準備しておくことで、私語が生じるのを予防できるかもしれない。

そして、二つ目に、わかりやすい「教材・資料」の開発が必要である。教員の口頭での説明により、資料は難しくても内容を理解することは出来る、とする学生が多かつたが、「文字ばかりで難しい」という意見もあつた。そのため、次年度は、視覚的な理解を促す資料を付け加えて、学生が自ら読んでみようという意欲を持てるよう教材作成時に創意工夫する必要があるだらう。インターネット接続しながらの講義のメリットとして、資料としての動画サイトなどの利用も可能になるかもしれないと考える。

### （8）秋学期2年次生「科目H」担当H

#### D [現状説明]

この授業は、公認心理師資格に関わる科目である。「身体障害、知的障害及び精神障害の概要」と「障害者・障害児の心理社会的課題及び必要な支援」を学ぶ。障害者支援の専門的な知識と特別支援教育の在り方、地域支援の在り方などについて学ぶ授業である。基本的にパワーポイントのスライドと手持ちのレジュメを使用して、授業を進めた。また、新型コロナ感染予防対策で座席を指定し、間隔を開けて着席させた。授業中は必ずマスクを着用し、換気をしながら授業を行つた。希望し、大学に認められた数人はZoomを用いて、遠隔で授業に参加したが、基本的には対面授業で行つた。

この授業では、対面授業で2回アンケートを行つた。1回目は9回目の授業である2020年11月20日（金）、2回目は14回目の授業である2021年1月15日（金）に実施した。

#### C [点検・評価]

#### <アンケート結果>

1. 授業の内容について、分かりやすかったです？

	11月 (回答者数 12人)	1月 (回答者数 11人)
(1)分かりやすかった	9人	7人
(2)どちらかというと分かりやすかった	3人	4人
(3)どちらかというと分かりにくかった	0人	0人
(4)分かりにくかった	0人	0人

2. 授業の説明の仕方や話し方は、分かりやすかったです？

	11月 (回答者数 12人)	1月 (回答者数 11人)
(1)とても分かりやすかった	10人	8人
(2)どちらかというと分かりやすかった	2人	3人
(3)どちらかというと分かりにくかった	0人	0人
(4)分かりにくかった	0人	0人

3. パワーポイントのスライドの文字やスライドの速さは、見やすかったです？

	11月 (回答者数 12人)	1月 (回答者数 11人)
(1)文字の大きさも速さも丁度よい	12人	10人
(2)文字を大きくしてほしい	0人	1人
(3)スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	0人
(4)文字を大きくして、スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	0人

#### <アンケート自由記述欄>

##### ① 第1回目のアンケート

- ・新しいことが学べた。(3)
- ・パワーポイントが見やすい。
- ・支援について以前よりも、よく分かった。点字ブロックやスロープのために道を開けようと考えるようになった。

##### ② 第2回目のアンケート

- ・パワーポイントの字を、もう少し大きくしてほしい。
- ・レジュメやスライドが分かりやすく、復習しやすい。
- ・支援の現状について授業を受けて、初めて分かった。様々な支援に興味がわいた。
- ・その人に合った支援が大切だと学んだ。今までニュースを見ても難しくて分からない言葉があったが、授業を受けてからは聞いたことのある言葉がいっぱいになり、分かりやすくなつた。
- ・知らないことをたくさん学べた。(3)
- ・先生の授業は大好き。

#### <長所・特色>

- ⑦ スライドで内容を提示するとともに、レジュメを配布して授業を行った。手元のレジュメで専門用語などを確認しやすく、復習などに役立っている。
- ① 「知らないことを学べた」と回答する学生が多くなった。この授業では、障害者・障害児支援の基礎的な専門知識を中心に特別支援教育の制度や地域における支援など幅広い内容を学ぶ。関連する専門知識をより多く学んでいると考えられる。
- ⑨ 特別支援教育などに関連する専門知識を系統立てて学んだことで、基礎的な専門知識が

より深く身に付いた。ニュースの内容が分かるようになったなど、自分の日常生活の中で学んだことを生かす様子も見られた。

<問題点>

- ⑦ パワーポイントでの解説を行ったが、文字を今より大きくしてほしい、とアンケートで回答した学生が見られた。多くの事柄を解説するので、スライドを作成する際に、なるべく見やすい大きな文字にするなど、スライドを提示する上での工夫を行う必要がある。
- ① 学ぶ専門知識に一度に多く触れることになるので、専門知識を整理し、関連付けながら、分かりやすく伝える。
- ⑨ 自分の聞いたニュースや日常生活で専門知識を活用する学生がいたので、関連するニュースや実際にどのような取り組みがあるのかを適宜、紹介する時間を更に設ける。

A [改善策]

今後の授業に生かすべく、改善策を考察した。この授業を通して障害についての専門的な基礎知識、特別支援教育、地域支援の専門的な基礎知識を系統立てて学ぶ。初めて学ぶ知識が多い学生もいるので、多くの知識同士を分かりやすくまとめ、知識同士の関連が分かるようになることが重要である。また、学生の中には授業で学んだ知識を生かして、ニュースなどをより深く理解するようになった学生もいた。学んだことが、実際にどのような支援や制度になっているかが、よく分かるということは、実際に対人支援を行う上で必要不可欠な部分である。より分かりやすい授業を目指し、スライドを見やすいように作成する、実際の支援の様子を更に伝えるなどの改善策が考えられる。

(9) 秋学期3年次生「科目Ⅰ」担当Ⅰ

D [現状説明]

子育てを社会全体で支える「子ども・子ども支援制度」がスタートし、幼稚園・保育園・地域で子育て支援が盛んに行われている状況である。だからこそ子育て支援はとは何かを考える必要がある。保育者を目指している学生が地域社会で取り組まれている様々な子育て支援の実状を知り、子育て支援の意義や必要性、どのようなニーズがあるのかなどを把握し、考察することが重要な学修ポイントであると考えるようになった。また、子育て支援が地域に根差し、展開できるよう社会背景の理解を深めていく必要性が求められている。

授業アンケート結果 回収数(6名)

設問	回答基準	2021/1/20 実施	
①『科目Ⅰ』の授業に興味はあったか？	ア・興味があった	5	83%
	イ・少し興味があった	1	17%
	ウ・あまり興味なかった	0	
	エ・興味がなかった	0	
どのような理由ですか	・子育て家庭において社会としてどのような支援の形があるのか気になっていた。 ・学校で実施されている支援に興味があった。 ・保育現場に求められている支援だから。 ・実践の授業があり、経験になると思ったから。		
②『科目Ⅰ』の内容は理解できたか？	ア・よく理解できた	3	50%
	イ・まあまあ理解できた	3	50%
	ウ・あまり理解できなかった	0	

どのようなことを学び、理解しましたか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て支援の意義(6人)</li> <li>・子育てをめぐる諸課題(6人)</li> <li>・法令に基づく子育て支援の位置づけ(2人)</li> <li>・子育て支援に関して配慮すべきこと(1人)</li> <li>・地域における子育て支援事業の実状(6人)</li> <li>・関係機関との連携の必要性(4人)</li> </ul>
③授業の中で印象に残ったことは何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て支援の社会背景や必要性(6人)</li> <li>・海星子育てひろばの実践の取組み(6人)</li> <li>・外部講師による地域の子育て支援の講話(3人)</li> </ul>
④子育て支援の実践においてどのようなことに苦労したり困ったり、悩んだりしましたか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な手遊び歌の選定(5人)</li> <li>・デイリープログラムの順番や時間配分(3人)</li> <li>・誘導の言葉かけのタイミング(6人)</li> <li>・話しかけるコツやタイミング(6人)</li> </ul>
⑤子育て支援の実践の経験を通して、得たものや感じたことは何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨機応変に対応すること。そのためにはたくさんの知識が必要だと感じた。(2人)</li> <li>・乳児への言葉かけや接し方を学べた。(2人)</li> <li>・保護者への対応がいい経験になった。(2人)</li> <li>・効率よく、てきぱきと行動すること。(3人)</li> <li>・技術や工夫することの大切さを学んだ(2人)</li> <li>・準備や見通した活動の大切さを学んだ。(2人)</li> </ul>

#### C [点検・評価]

授業の最後にアンケートを取った。今回は、主に記述形式でのアンケートとした。関心度の差はあるが子育て支援に興味があつて履修した学生であったため、授業の欠席者はなかった。

#### <長所・特色>

子育て支援に興味があつた理由として、「子育てひろば」ばかりをイメージしていたようだ。授業の中で「子育てひろば」だけが支援ではないということを学び、支援が求められる社会背景、制度、国の施策などにも関心がいくようになった。また法令改訂の理由の一つに子育て支援の項目の充実が挙げられることを改めて知ったようだ。

外部講師(N区地域子育て支援センター長)による子育て支援に関する講義は、関心をもつて受講した。自分の居住地での支援内容を調べるきっかけとなった。

「海星子育てひろば」に参加することに、大変意欲的であった。授業外にも集まり内容の検討、製作、プログラムのシミュレーションなどを行った。1回目は緊張があり、動きや言葉かけがぎこちなく感じた。回ごとの反省や課題、またアイデアなどを提出してもらい次回へのプログラムへの参考とした。教員からの指示だけなく、今の自分たちには何ができるかを見極められたのではないだろうか。全員が感じているように、自分から相手に働きかけることの難しさや大切さをたくさん経験したと思う。来年度も「海星子育てひろば」に参加したいという気持ちをもってくれたようだ。

#### <問題点>

今年度は、授業の一環として保育所や地域で開かれている「子育てひろば」等に積極的に参加し体験型の授業を進めていきたかった。しかしコロナ禍のため、保育所や地域の子育てひろばはほとんどが中止傾向にあった。また、外部の参加は規制や条件が厳しく予定していた活動ができなかつた。来年度も生きた学修ができる限り実施したいがコロナの終息は時間がかかりそうである。しかしあきらめるのではなく、今年度実施して経験をもとに机上の学修と実体験の学修を組み合わせた方向で知識や技術の向上を目指す必要性があると思う。

#### A【改善策】

子育て支援の必要性や制度、福祉や教育施設を核とした子育て支援、地域で行われている子育て支援の現状、子育て家庭に対する支援のあり方など学びが必要だと思われる。しっかりと知識を持ったうえで、技術を重ねていくために子育てひろばでの実践は効果があると考えられる。講義と実践のバランスを取り、授業を展開していくことが望まれる。その結果学生自身の目的や向上心、モチベーションもはっきり見えてくるのではないだろうか。

#### 4. A【学科の改善策】

学生の学修への意欲と理解度を高めるために、科目の特性に応じて次のような取組みを行っていきたい。

- (1) 授業内容の充実を図る。
  - ①「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「学習指導要領」等の理論を理解し、指導案作成につながる授業を構成する。
  - ② 現場学修や実体験を通して学ぶ機会を設定する。
  - ③ DVDや動画、パワーポイント、事例等を有効に活用する。
- (2) 授業方法を改善する。
  - ① レポートや学修の振り返りを通して、学修意欲の向上を図る。
  - ② 学びの成果と課題が実感できるように、小テストを実施する。
- (3) 遠隔授業の内容や評価方法について検討する。
- (4) 教員の連携を強化する。

